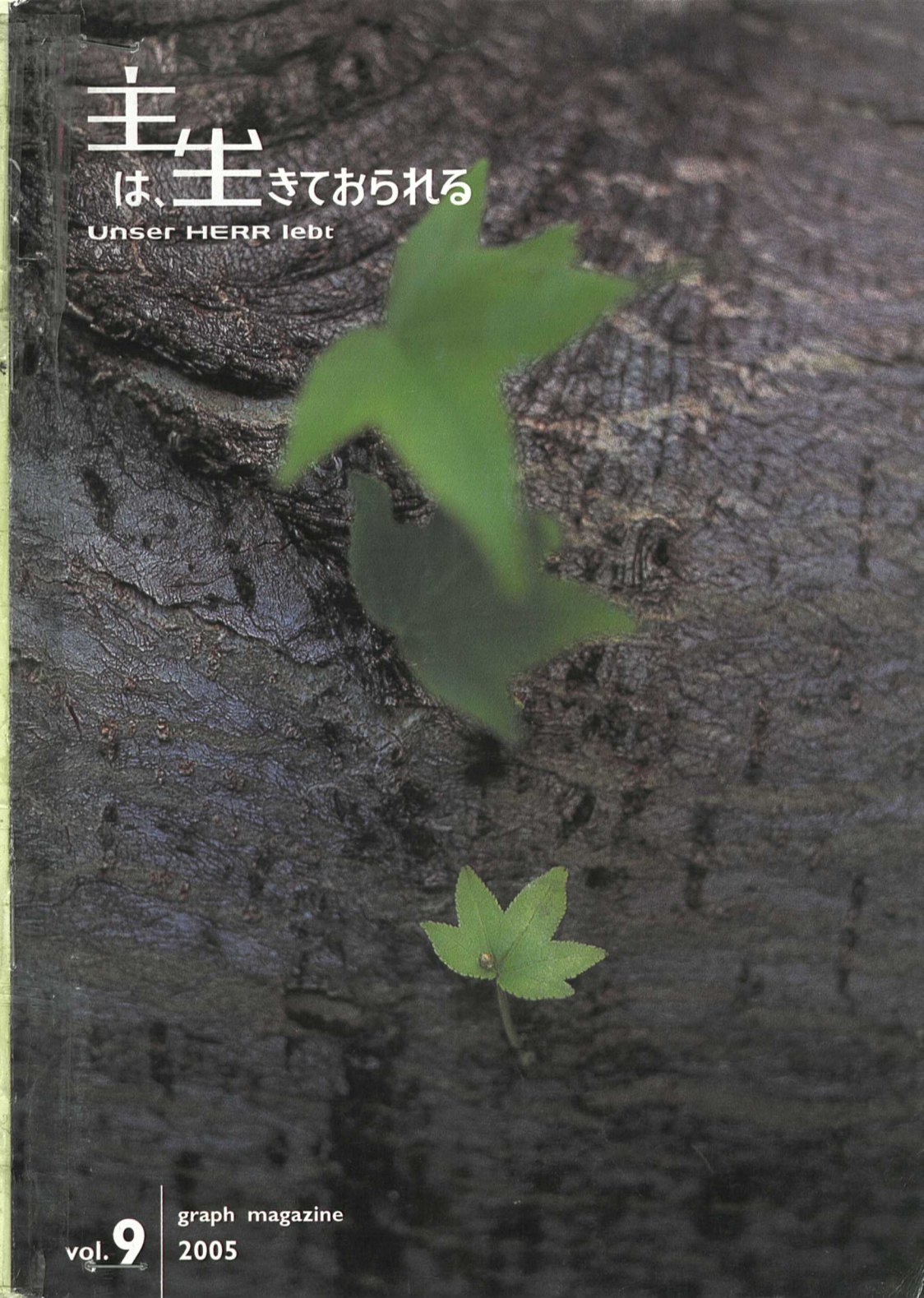
まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

Unser HERR lebt
主は、生きておられる vol. 9 | 定価100円（本体95円）

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

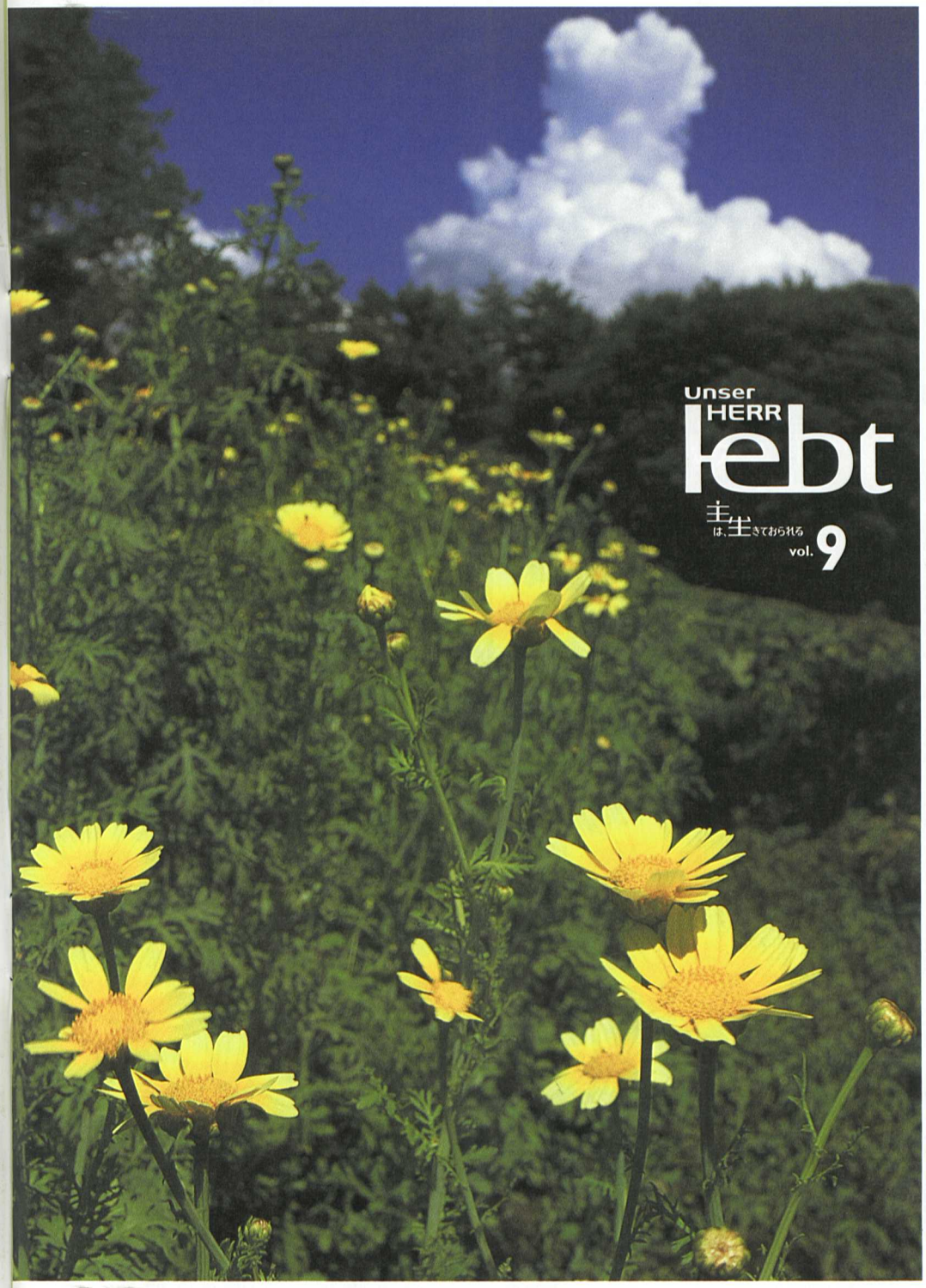


vol. 9

graph magazine
2005

INDEX

子供と親の問題について——
巻頭メッセージ 04 「イエス様大好き」集会になりましょう！／ゴットホルド・ベック
4人のメッセージ 14 主を恐れることは知識の初めです／会沢 道広
22 悔い改めの重さ／古川 卓
30 イエスさまの贈り物／青柳 惇
36 人知をはるかに越えた愛／中山 圭二
連載メッセージ 42 ［モーセの十戒］第9回 神の聖なる戒め ／ゴットホルド・ベック
7人の証し 52 キリスト教からイエス・キリストへ／重田 定義
59 主のご計画に従って／織田 史彦
64 祈りを聞いてくださるイエス様／織田 仁子
68 イエス様は祈りに答えてくださいます／江藤 尚広
71 主イエス様はすばらしいお方です／江藤 絵里
74 主のあわれみは尽きません／兵藤 勝義
77 神のなさることは時にかなって美しい／兵藤 幸江
聖書は何と言っていますか？-1
メッセージ 80 罪とはどのようなものでしょうか／ゴットホルド・ベック
メッセンジャー予定表 94 メッセージ当番表 2005年6月～9月
各地の集会から 98 こちら名古屋集会で～す
100 インフォメーション・ボックス
102 結婚・葬儀の報告
ケーキ 103 ゼブラクーヘン
106 キリスト集会へのご案内
108 本の紹介
110 全国の集会住所録



子供と親の問題について

「イエス様大好き」集会になりましょう！

ゴットホルド・ベック







人が、若い時に、くびきを負うのは良い。
（哀歌 3・27）

年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。
（1テモテ 4・12）

若い者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。（1ヨハネ 2・14）

集会にはいろいろな人々が集っています。年配の方と若い人とでは、その考え方が違うこともあるでしょう。でも、そんな違いはとるに足りないことです。聖書はなんと言っているか、それだけが私たちにとって重要です。
若者は将来の担い手として、大切にされなければなりません。そして、若い人々は、サムエルやダビデ、またテモテのようになってもらいたいものです。この三人はいろいろなことで悩みました。哀歌に「人が、若い時に、くびきを負うのは良い。」（哀歌3・27）とあるように、若い人が悩むのはよいことです。若い時に苦労しなかった人は、後で必ず、人並以上に悩むようになります。
サムエルは、おそらく5、6歳のころから親と離れて、エリという大祭司と一緒に住むようになりました。聖書は次のように言っています。

少年サムエルはますます成長し、主にも、人にも愛された。（1サムエル 2・26）

同じことがあなたについても言えるとしたら、何とすばらしいことでしょうか。「サムエルは主にも人にも愛された」のです。**「少年サムエルはエリの前で主に仕えていた。そのころ、主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。」（1サムエル3・1）**サムエルは人間ではなく、主に仕えていました。このサムエルが多くの人々の祝福になったわけは、彼が「聞く耳を持っていた」からです。

そのうちに主が来られ、そばに立って、これまでと同じように、「サムエル。サムエル。」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申し上げた。
（1サムエル 3・10）

サムエルは自分の名が呼ばれたとき、主に向かって**「主よ。お話しください。しもべは聞いております。」（1サムエル3・9）**と答えたのです。
また、サウルはダビデに言いました。**「あなたは、あのペリシテ人（ゴリヤテ）のところへ行って、あれと戦うことはできない。あなたはまだ若いし、あれは若い時から戦士だったのだから。」（1サムエル17・33）**しかし、主の前では、「若すぎるから戦えない」ということはありません。ダビデは若者でしたが、**「万軍の主の御名によって」（1サムエル17・45）**戦って勝利を得ました。次のみことばも同じことを言っています。

若い者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。（1ヨハネ 2・14後半）

「悪い者」とは悪魔のことです。若い者たちが悪魔に打ち勝って強い者になれたのは、「みことばが、うちにとどまっていた」からです。
そしてテモテについて、パウロはこのように書きました。

また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。（2テモテ 3・15）

テモテは幼い頃から聖書の話を聞いて育ち、救い主である真の神を信じていました。そして、彼はパウロの最も親しい同労者になったのです。しかも、それは若かったときだけではありませんでした。

テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもいないからです。だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。
（ピリピ 2・20、21）

信仰があっても、イエス様のことを無視して、自分のことを第一にしようとすれば、できなくはありません。こういう間違いを、私たちはついおかしがちです。大切なのは、「聖書が何と言っているか」だけだということを、いつも肝に銘じておきましょう。
確かに、若い人にとって親に従うこと、他人に従うことは、いやなことでしょう。しかし、大切なのは、「聖書は何と言っているか」だけです。

どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従ってそれを守ることです。私は心を尽くしてあなたを尋ね求めています。どうか私が、あなたの仰せから迷い出ないようにしてください。あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。主よ。あなたは、ほむべき方。あなたのおきてを私に教えてください。私は、このくちびるで、あなたの御口の決めたことをことごとく語り告げます。私は、あなたのさとしの道を、どんな宝よりも、楽しんでいます。私は、あなたの戒めに思いを潜め、あなたの道に私の目を留めます。私は、あなたのおきてを喜びとし、あなたのことばを忘れません。
（詩篇 119・9～16）

このように主のことを思うと、大いに祝福されます。聖書とは、何かを勉強する教科書ではなく、私たちにとって「元気の素」なのです。みことばに頼ると、必ず主は守ってくださり、導いてくださいます。神のみことばである聖書だけが、何が正しく、何が間違っているかを、はっきりと示してくださいます。ですから、子どもたち、中高生たちを責任を持って教育したいと思うなら、自分自身でみことばを読んで、そのみことばを若い人に伝えなければなりません。
三千年前にダビデ王は次のように告白しました。**「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」（詩篇119・105）**ですから、「どうすればいいのだろう」と考えるとき、心から求めて聖書を読んでください。イエス様がこの世に来られたのは、**「わたしを信ずるものが、だれもやみの中にとどまることのないため」（ヨハネ12・46）**だとおっしゃいました。

大切なのは、主イエス様を信じ、受け入れ、イエス様に従うことです。

ただ人間一人だけの力では、決して暗闇から脱出することはできません。「良心の呵責」から解放されることはありません。そして、真に満たされた生活を知ることもできません。そしてそれゆえに、イエス様はご自身の栄光を捨てて、この罪だらけの地上に来てくださいました。私たちの身代わりとなって、その裁きをご自身の上に受けてくださり、そのことを通して贖いの道を開いてくださったのです。主イエス様を信じる信仰とは、とりもなおさず「光に来ること」、「イエス様のみもとに来ること」です。そして、イエス様のみもとに来るものは受け入れられ、その罪は赦されるのです。

中高生のために祈り、奉仕している集会の方々、そしてご両親は「どうしたらいいのか」と思い悩むことがあります。どれほど考えても解決が見出せずに困っている人、悲しんでいる人がいます。「喜びの種であった子どもが、知らないうちに悩みの種になってしまった。どうすればいいのだろう」と。仮に世界一良い親がいたとしても、自分の子どもを思うようには育てられません。イエス様が憐れんでくださらなければどうにもならない、もうお手上げ状態なのです。

教育とは、本来、「導くこと、教訓を与えること、訓練すること」などの意味をもっています。しかし、今の親は、「教育」というと、「頭の知識を与えること」だと思い込んでしまっています。これは大変な間違いです。「教育」で大切なことは、教訓を与えること、啓蒙すること、また訓練することです。私たちは、意識して神のみことばである聖書を大切にしたいものです。昔のイスラエルの民は、心からみことばを大切にしていました。責任感をもってみことばを、子どもたちに教えたのです。



聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。 （申命記 6・4～7）

「主を信じなさい」というだけでなく「心から主を愛しなさい」と言っています。

それをあなたがたの子どもたちに教えなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、それを唱えるように。 （申命記 11・19）

これを知らない彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたが、ヨルダンを渡って、所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、主を恐れることを学ばなければならない。（申命記 31・13）

ここに出てくる、「主を恐れること」とは、心配すること、不安を抱くことではありません。それは「私は迷っています。教えてください。主よ、あなたが私を守ってくださらなければ私一人では何もできません。無理です。お願いします。」という心の態度をもつことです。

一体、何が人生にその意味と目的を与えるのでしょうか。現代人は皆、心の奥底では満たされていません。現代人には本当の意味で頼るべきものが何もないのです。「きっと別の人生があるのではないか、人生とはこんなに虚しいものであるはずがない」と思って、多くの人々は真理や本当の救いを求めます。人間は、にせ物ではなく、「本物」を必要としています。「本物」とは、十字架の上で犠牲になられ、復活なさり、今日も支配しておられる主イエス様です。イエス様を個人的に経験するまで、本当の満足感はありません。イエス様に出会って、イエス様に従う者だけが、本当の幸せ、また本当の意味での満たされた人生を経験することができるのです。イエス様は、**「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」**（ヨハネ 14・6）と言われました。本当の道、本当の目標はただ、主イエス様の内にのみあります。

集会に来る中高生のほとんどは、親から、また集会でイエス様のなされた救いについて聞かされ、それを信じ受け入れた人々です。しかし、子どもの時に信じ受け入れたとしても、中高生になって「悔い改め」を経験しないなら、その救いは中途半端です。中途半端なままでは、その後私たちの大きな問題になるでしょう。あなたがたは、やがて社会人になり、結婚します。年頃になって誰かを好きになるのは別に悪いことではなく、当然のことでしょう。しかし、結婚する前に親しい関係をもつことは罪です。

結局、それを隠すようになる。隠す者は成功しません。祝福されません。そして、主の祝福がなければ、人生は満たされないものになります。ある国の警察が、増加する一方の青少年犯罪に対して、「子どもにではなく親に」、警告をしました。タイトルは**「子どもを駄目にする十の法則」**です。

1 小さい時から「子どもが欲しがる物は何でも与えてごらんなさい」。そうすれば子どもは大きくなって、世界は自分のために何でもしてくれると思い込むでしょう。その結果、子どもはわがままな人間になり、犯罪者になりかねない恐るべき可能性をもつに至るのです。

2 「子どもが下品なことばを使ったときに、あなたもいっしょに笑うようにしてごらんなさい」。そうすれば子どもは、自分が人気者だと思い込んでしまうでしょう。つまり、あなたの間違った態度によって、子どもは厳しい忠告を受け入れるより、軽々しい笑いですべてをごまかすようになるのです。

3「信仰に基づく教育や、理想を目ざす教育を、すべて避けるようにしてごらんなさい」。子どもが18歳になるまで待って、その後は子ども自身に自由に決めさせるようにしてごらんなさい。その結果、子どもは権威を恐れることを知らず、犯罪を簡単に行う人間に育っていくでしょう。

4 「子どもが散らかした物は、何でも片付けるようにしてごらんなさい」。それが当たり前だ、と子どもが思いこむまでに、子どものために何でもしてあげてごらんなさい。その結果、子どもはいつも他人に責任転嫁し、自分だけは正しいと思うような人間になり、犯罪を犯しても、自分は正しい、社会が間違っていると思うようになってしまうでしょう。

5 「子どもがいる前で、いつも平気で夫婦喧嘩をしてごらんなさい」。その結果、両親が離婚するようなことになっても、子どもは別に驚かず、離婚という重大なことも当たり前のことだと思うような人間になってしまうでしょう。

6 「いつも欲しがるだけのお金を子どもにあげてごらんなさい」。そして、その子が大きくなっても、自分で働いて苦労しなくてもいい、と思わせてごらんなさい。自分のした苦労を子どもにはさせたくない、と思っている親がいます。しかしその結果は、大人になっても怠けて少しも仕事をせず、遊んでばかりいる人間が出来上がってしまうのです。遊びが度を過ごすと犯罪に走ることが多くなります。

7「子どもが何を食べたいか、何を飲みたいか、何を楽しみたいと思っているかを調べて、すべて満たしてあげるようにしてごらんなさい」。願望を満たしてやらないと、卑屈な性格になる、と思っている親がいます。しかし、子どもの願いをすべて満たしてやり、子どもが満足する物をすべて与えることは、恐ろしい結果につながることを知らなければなりません。その結果は、子どもがもっとたくさん、もっといい物を欲しがるようになり、お金や物を盗むような犯罪に走らせてしまいます。

8 「学校の先生、お年寄りや隣人に対して、いつも子どもの味方をするようにしてごらんなさい」。あなたは心の中で、彼らは私の子どもを理解できず、私の子どもに嫌なことを言ったり批判したりするのではないかと恐れていませんか。そのような一方的な過保護の状態は子どもを間違った道に追いやることが多いのです。

9「子どもが重大な問題や壁にぶつかったとき、それはあの子自身の問題だから、私はどうすることもできない、と言って、放任してごらんなさい」。子どもは、生まれつき犯罪者になるように生まれてきたのではなく、親の放任や間違った教育によって犯罪者になってしまうのです。

10 以上のような過保護の教育の結果、その報いとして親が苦しまなければならないということを、真剣に考えることです。それ以外にいかなる解決方法もありません。

聖書は、もっと端的に言っています。

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。 **（エペソ 6·1）**

子どもたちが親に従わなければならないのは、親がイエス様を信じているからではありません。親が正しいからではありません。「親だから」です。これは、絶対的な神のみことばです。

両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。

父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。

（エペソ 6·4）

ソロモンは言っています。

むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。

（箴言 13·24）

むちを控えることによって、結果として子どもを憎んでいる親はたくさんいます。

望みのあるうちに、自分の子を懲らしめよ。

（箴言 19·18）

大人になってからでは遅すぎるのです。大人になってからでは親は責任をとることができません。

子どもを懲らすことを差し控えてはならない。むちで打っても、彼は死ぬことはない。あなたがむちで彼を打つなら、彼のいのちをよみから救うことができる。

（箴言 23·13、14）

むちと叱責とは知恵を与える。わがままにさせた子は、母に恥を見させる。･･･
あなたの子を懲らせ。そうすれば、彼はあなたを安らかにし、あなたの心に喜びを与える。

（箴言 29·15、17）

知識を与える教育も確かに大切ですが、もっとも大事なことは、子どもが真の神を恐れ、主を見出すこと、主に仕えることではないでしょうか。親が日々、「主よ、この子どもは私のものではありません。あなたによって与えられた、あなたのものです。私には何もできません。あなたにお任せいたします。」という態度をとると、主は必ず働いてくださいます。聖書は**「主を恐れることは知識の初めである」（箴言1·7）**と言っています。

集会のある家族は、次の八つの目標を持って生活しています。

1. イエス様大好きな家族になろう。
2. お父さんはイエス様に従い、お母さんはお父さんに従い、子どもたちは親に従う家族になろう。

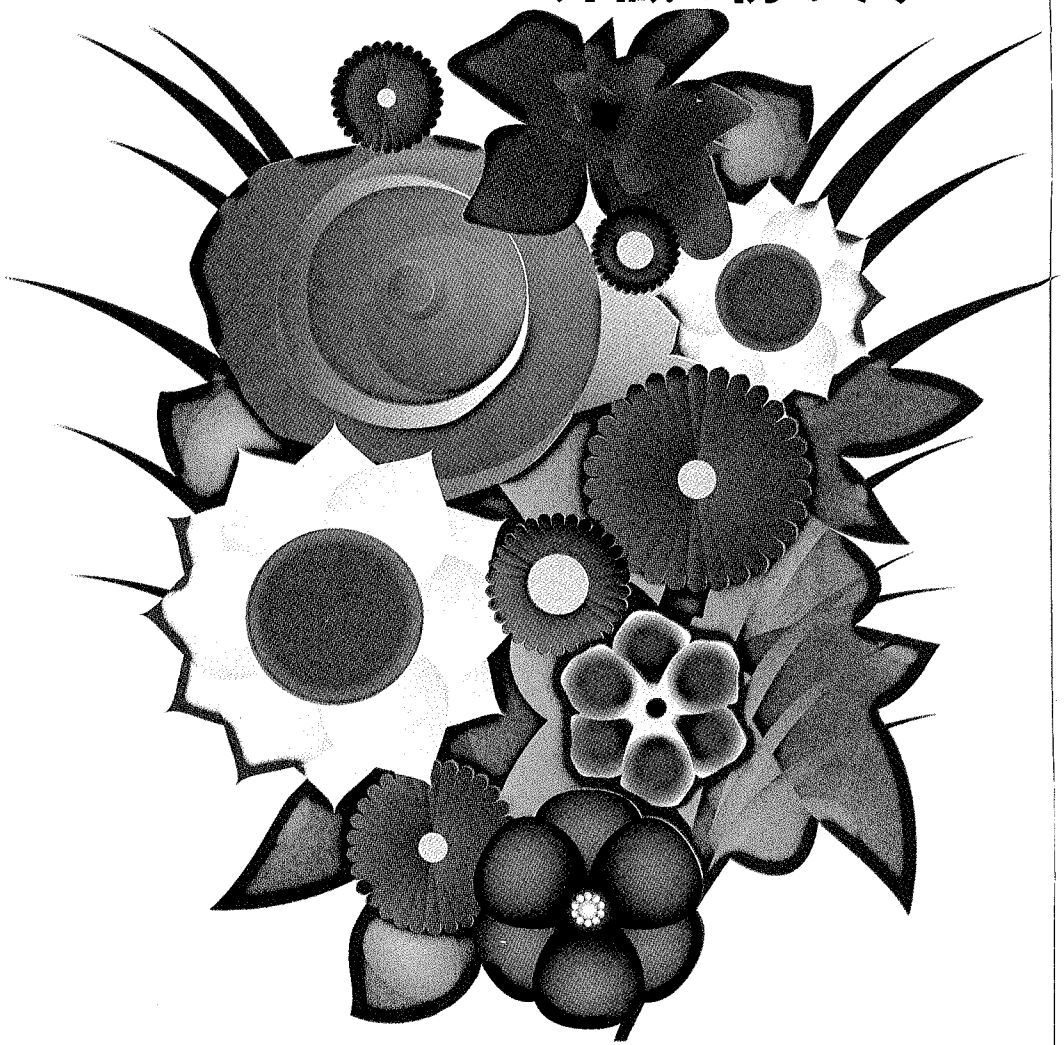
3. みんなが優しい気持ちを持ち、愛し合い、祈りあい、思いやりのある家族になろう。
4.「ありがとう」と言える、優しさのあふれた家族になろう。
5. 家族の中から意地悪な気持ちを追い出そう。
6. 間違ったときには「ごめんなさい」と言える家族になろう。
7. 困っている人や悲しんでいる人のためにイエス様に祈る家族になろう。
8. イエス様に喜ばれる家族になろう。

この八つの項目は、単に家庭のためだけの目標ではありません。そっくりそのまま、私たちの集会にもあてはまります。「イエス様大好きな集会」になろう。兄弟たちはイエス様に従い、姉妹たちは兄弟たちに従い、子どもたちは親に従う集会になろう。みんなが優しい気持ちを持ち、愛しあい、祈りあい、思いやりを育てる集会になろう。「ありがとう」が言える明るい声の溢れる集会になろう。集会の中から意地悪な気持ちを追い出そう。間違ったときには「ごめんなさい」と言える集会になろう。他の困っている人、悲しんでいる人のために祈る集会になろう。また、イエス様に喜ばれる集会になろう。皆がこのような心がまえを持つと、イエス様は必ず奇蹟をなしてくださいます。「イエス様のために生きたい」と望むことこそが大切です。

もうひとりの集会の方をご紹介しましょう。彼は大学の教授で、政府からいろいろな国に派遣された立派な学者でした。彼は、あちこちの教会に行きましたし、聖書も読んでいましたが、信仰に確信が持てなかったのです。彼がある時、集会場に遅れて入って来たとき、私は次のような話をしていました。「集会の玄関で、私はある姉妹に『どう、元気？』と聞いたのです。すると彼女は『イエス様大好き！』と言ったのです。こう言える人はもう大丈夫です・・・」この話が彼にとっての解決になりました。「ああ、そうか。イエス様大好きになればいいんだ」とわかり、彼はその日、イエス様のために生きたいと言っただけではなく、「イエス様大好き」という歌さえ作ったのです。その後彼はイエス様を知らない人々によく伝道し、必ずこの歌を歌ったのです。恥ずかしがらずに歌いました。そして彼は、洗礼を受けました。親戚や友人が見ている中、洗礼を受ける前に彼は両手をあげて「イエス様大好き！」と叫んだのです。つまり、そういうことなのです。イエス様が大好きでなければ、いくら信じていても、十分ではありません。そしてイエス様が大好きになる方法は、イエス様の十字架について考えることです。私たちの永遠の幸せのために、イエス様は全ての罪を負ってもいい、のろわれた者になってもいいとお考えになりました。「人間一人一人のために喜んで犠牲になろう」。私たちにはこれがどれだけのことを意味しているのか、とうていわかりません。私たちが死んで永遠の世界に入った後に、初めてわかるでしょう。しかし、イエス様の十字架について考えると、自分自身が小さな存在になります。そして、「イエス様のために生きたい」と必ず思うようになります。「イエス様大好き！」集会になりましょう。



主を恐れることは知識の初めです



昨年末に起きたスマトラ沖大地震。被害は12カ国に及び一瞬にして30万人（死者・行方不明者総数）を超す人々の命が奪われ、南の楽園は廃墟と化しました。このような災害を通して天地宇宙の創造者、神は私たちに何を語ろうとしているのでしょうか。

神の存在

先日検査のために胃カメラを飲みました。食道、胃、そして腸へ…身体の中が映し出されていきます。初めて目にするサーモンピンク色に輝く胃の美しさにしばし我を忘れてしまいました。普段私たちは忙しさに追われ、病気でもしない限り身体の中のことは、全く意識せずに暮らしています。しかし、間違いなく私たちは胃をはじめ、多くの臓器そして器官のお世話になっています。眠っている時も休むことなく、命を与えられてから地上を去るときまで、毎日毎日きちんと働き続けてくれています。

小さな一つの卵子に精子が受精して細胞分裂が始まり、やがて母の胎のうちで小さな生命が形造られていきます。一つ一つの細胞はDNAの中に隠されている30億個にも及ぶ暗号すなわち設計図によって血となり肉となり骨となり、そして10ヶ月の時を経てその細胞の数は60兆個という途方もない数にまで増え続け、母の胎内の偉大な作業は終了し、一人の人間がこの地上に生を受けます。生命の誕生とは母の胎内でおどろくべき事業が行なわれた結果です。“生きている”ということは、体の中で一瞬も休むことなく大変な作業が行なわれていることを証明しています。

私たちは毎日の生活を特別意識することなく当たり前のように過ごしていますが、その背後には「神の存在」があり、「神の意志」「神の愛」なしに人は一瞬たりとも生きることはできません。しかし、私たちはその存在に心を向けようとしません。人は神の意志で存在し、この地球を含むすべての物は、創造者すなわち神によって造られた、と聖書に記されています。

初めに、神が天と地を創造した。
（創世記　1・1）

すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。（ヨハネ　1・3）

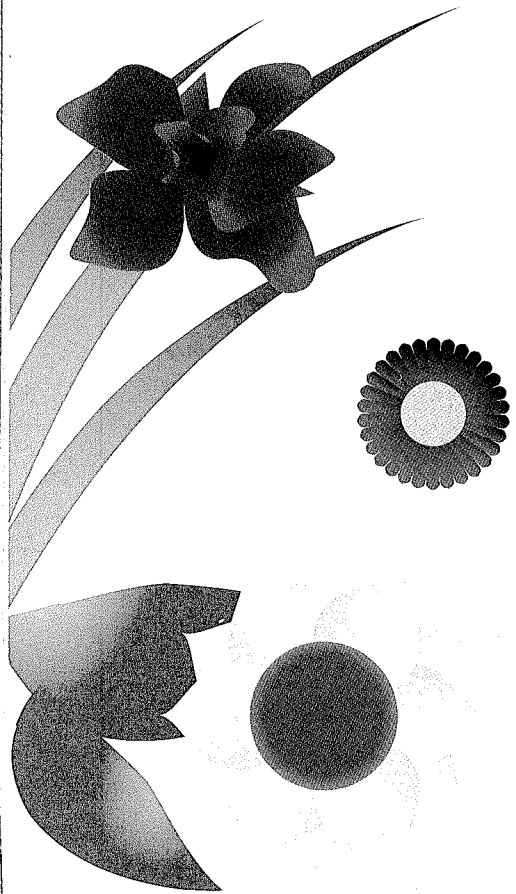
それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。・・・あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。
（詩篇　139・13、16）

あなたは妊婦の胎内の骨々のことと同様・・・そのように、あなたはいっさいを行なわれる神のみわざを知らない。（伝道者　11・5）

私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。（使徒　17・28）

世界の至るところに美しい花が咲き、四季折々私たちの目を楽しませてくれます。その

主を恐れることは知識の初めです



カラーの世界は感動以外のなにものでもありません。地上には多くの動物や鳥、そして昆虫たちが存在し、私たちの生活にうるおいを与えてくれます。また海の中には多くの生物が様々な生活を営み、私たちの生活に必要な食料を供給するばかりでなく、多くの楽しみを提供してくれています。熱帯の海に住む魚たちの美しさは目を見張るばかりです。

私たちは自然の美しさ、カラーの世界、多くの生物たち、美味しい食物、香り、五感で感じるあらゆるものを当たり前と思っていますが、本当はすべて創造者である神が人間を愛しているがゆえに、そのような素晴らしいものを提供してくださっているのです。私たちを取り巻くすべての物に感動を覚えることができるのは唯一人間だけです。聖書のなかに、神がどのような思いで人を創造されたのかが記されています。

「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」・・・神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。(創世記　1・26、27、31)

他の生物とは全く異なった思いをもって神は人を創造しました。人は神に似る者また神のかたちに創造されました。そして神は人が幸せに、喜びを持って楽しく暮らすために必要なものをすべて与えてくださったのです。

創造の業を終えた主が、その創造されたものを見ると、すべてが神の目から見て非常に良かったと記されています。

終わりの日

天に輝くたくさんの星の中で、人間の住むことのできる星は、現代の科学で知りうる限り地球ただひとつです。人類は幸せを求め豊かさを追求し経済発展を遂げました。しかし、その一方で、砂漠化、温暖化等が進み、世界各地で大洪水、干ばつ等の災害が頻発するまでに地球環境は悪化しました。また、人々の心も荒廃し、紛争、戦争は世界の至るところで繰り返され、多くの人々の生命が奪われています。聖書ははるか昔に書かれた書物でありながら、このような現代の状況をはっきりと預言しています。

終わりの日には・・・人々は、自分を愛する者、金を愛する者・・・神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり・・・(2テモテ　3・1～4)

「世の終わりには、どんな前兆があるのでしょう。」そこで、イエスは彼らに答えて言われた・・・戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが・・・民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります・・・多くの人たちの愛は冷たくなります。(マタイ　24・3～12)

日本の社会も、毎日のように凶悪犯罪が発生し、痛ましい事件が次々に起きています。また、自殺者の増大、こんな小さな一つの国で毎年3万人以上の人が自殺している現実を考えると、異常としか言いようがありません。

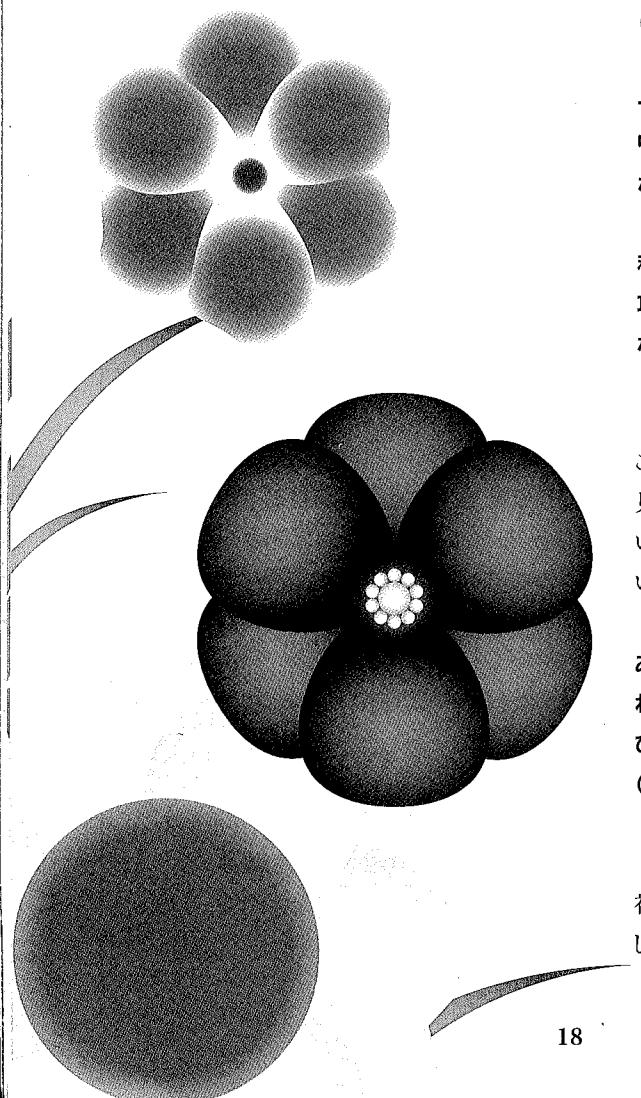
本当の幸せはどこにあるのでしょうか。また神の目から見て非常に良かった地球が、なぜ誰の目から見てもこんなにひどい状況になってしまったのでしょうか。

空の空

聖書の中にソロモンという王様のことが記されています。誰もが認める偉大な大王でした。知恵も権力も富もあり、誰もがうらやみ憧れる存在でした。彼は人の望むものをすべて手に入れることができました。知恵も権力も富も快楽も名声も、すべてが彼の望むままでした。しかし彼は言います。人生について、「空の空。すべては空」。山の頂上を目指し歩み続け、その頂きに立ったとき、そこにあったものは彼の追い求めてきた「幸せ」「平安」「満足」ではなく「空しさ」でした。努力して人の望むものをすべて手に入れても、「そのような生き方は空しいだけ」というのが彼の結論でした。

空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。(伝道者　1・2、3)

主を恐れることは知識の初めです



私は事業を拡張し、邸宅を建て･･･銀や金、それに王たちや諸州の宝も集めた･･･人の子らの快楽である多くのそばめを手に入れた。私は、私より先にエルサレムにいただれよりも偉大な者となった。しかも、私の知恵は私から離れなかった。私は、私の目の欲するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆる楽しみをした。･･･しかし･･･振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。
（伝道者　2･4、8～11）

一生は悲しみであり、その仕事には悩みがあり、その心は夜も休まらない。これもまた、むなしい。（伝道者　2･23）

私はまた、あらゆる労苦とあらゆる仕事の成功を見た。それは人間同士のねたみにすぎない。これもまた、むなしく･･･（伝道者　4･4）

このように書いた英知の人ソロモンは、この虚無から抜け出し、本当の生きがいを見つけるために、一生のうちのなるべく早い機会に「創造者である主を覚えよ」と説いています。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。
（伝道者　12･1）

人は神により創造され、本来神とともに生き、神とともに暮らすように造られています。しかし神の命令に背き罪を犯した人間は神と共に住むべきエデンの園から追放されました。そして神と離れた時から人間の孤独、悩みが始まりました。すなわち「空しい」者となったのです。人は創造者、神を離れて本当の幸せを自分のものとすることはできません。人間にとって生きていくために必要なものはすべて神から与えられるのです。本当の「愛」「平安」「喜び」「希望」すべて神が用意し与えてくださるのです。

主からのメッセージ

地球上に起きる災害を通して創造者、神は私たちに何を語ろうとしているのでしょうか。大きな災害を目の当たりにした時、私たちは人間としての限界、無力さを認めざるを得なくなります。その時初めて恐れるべき方の存在、すべてを支配しておられる天地万物の創造者に心を向けます。創造者、神は私たちが一人として滅びることを望まず、すべての人が造り主のもとに立ち帰り、救われて「永遠のいのち」を得ることを願っておられます。

主を恐れることは知識の初めである。
（箴言　1･7）

地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。
（イザヤ　45･22）

本当の救い主

神のひとり子イエス･キリストはこの地上に人として生まれ、私たちの罪の身代わりとなって十字架上で死なれました。そして3日後に復活され、今も生きておられます。イエスキリストを信じるものには「神との平和」「本当の平安」「永遠のいのち」が約束されています。

キリストは･･･十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ･･･キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。
（1ペテロ　2･22、24）

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。
（使徒　4･12）

わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。（ヨハネ　6･40）

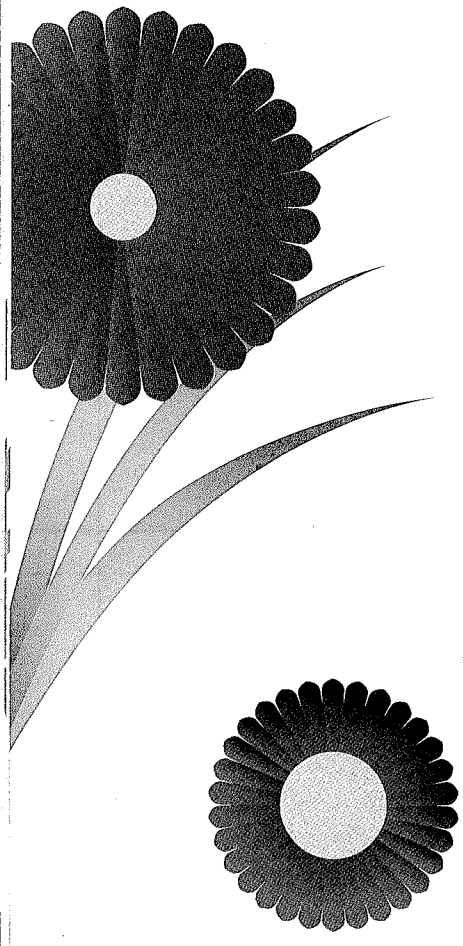
イエスキリストは「愛」「平安」「道」「真理」「いのち」そのものです。

生きておられる主

親しい友人がガンを宣告され、4年にも及ぶ長い闘病生活を経て、昨年天に召されていきました。彼は最も誇りとする頑健な肉体を病に冒され、すべてを失った時、真に頼るべきものを発見しました。

私たちひとりひとりを愛し、私たちの永遠の救い、本当の幸せのために、犠牲となってくださった神のひとり子、イエス･キリストです。

主を恐れることは知識の初めです



彼は激しい痛みの中で病院に担ぎ込まれました。すぐに手術が決まり、難しい手術を前に大きな不安が心を占領しました。いろいろな状況を想定し、どんなに考えても努力しても不安は消えず苦しみが増すばかり。とうとう疲れ果て、「自分ではどうすることもできない。自分のいのちは主から与えられたもの。主に任せるしか道は残されていない。」と必死に主に祈りました。すると、いつの間にか不安は消え、平安で満たされていました。本当に不思議な体験でした。大手術を控えている病人とはまったく思えない落ち着きに、医師や看護士たちは、みんな驚いていました。一番驚いたのは彼自身でした。手術の前日も安定剤の世話になることなく、ぐっすりと眠りにつくことができました。手術は成功し、回復も順調に見えました。

ところが3ヶ月もしないうちにガンが再発、再び手術を受けることに。“生きたい”と強く願った時に、また不安が心を占領しました。苦しみの中で初めの手術の時のことを思い出し、「主にとって不可能はない」と信じ祈ると、平安が訪れました。それからの日々は痛みとの戦いの中にあっても、いつも主に守られ、本人も信じられない平安と喜びに満たされ続けました。

この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。
(詩篇　107･6)

私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。
(イザヤ　38･17)

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト･イエスにあって守ってくれます。
(ピリピ　4･6､7)

「主は生きておられる。私の祈りに耳を傾け、私の必要をすべて満たしてくださる。」彼は体験を通して主の存在を確信しました。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。」(詩篇119･71)この聖書のみことばが彼の口から幾度も語られました。長い闘病生活の中で、死を宣告されながらも彼は喜び続けました。彼の喜びは本物でした。泉が水を湧き出すように途絶えることなく、喜び続けました。肉体的な痛みと苦しみがある中で、彼は見舞いに来る人々に笑顔で応対し、訪れた人々のために祈り続けました。人々は心の中に温かいもの、そして穏やかな気持ちとともにふつふつとした喜びを感じ、病室を後にしました。彼によって元気を与えられ、希望を与えられた、とても不思議な体験でした。

イエスは答えて言われた。･･･「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」(ヨハネ　4･13､14)

私の神は、キリスト･イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。(ピリピ　4･19)

主は病のなかにある彼を通して私たちに生きる希望を与え、「死は終わりではない」ことを彼の生涯を通して語り続けてくださいました。彼は地上での最後の日まで喜びを失うことなく、私たちを愛し、祈り、励まし、そして天国を確信し、約束の地(天国)へと一足早く旅立って行きました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ　3･16)

私たちの国籍は天にあります。(ピリピ　3･20)

一人でも多くの方が主イエス･キリストを信じ、本当の「平安」「喜び」「希望」を、そして、「永遠のいのち」を自分のものとされることを願っています。

わたし(イエス)は、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。(マタイ　28･20)



会沢道広
三愛プラント工業⑭勤務
千寿第8小、足立2中、都立航空高専卒業



悔い改めの重さ

あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、わたしは知りました。(ヨブ記　42・2)

それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。(ヨブ記　42・6)

あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。(ルカ　13・3)

あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。
(エゼキエル書　18・31)

生まれながらにして信仰深い人であったヨブも、大きな苦しみのなかで希望と落胆が大きく交差したのですから、信仰を持たない人や信仰の浅い人が苦しみにあえば、大きく落ち込むのは当然です。そこで、今回は、落ち込んだ心を主の前に悔い改めることによって希望の持てる歩みに変えられることを、ヨブとロビンソン・クルーソーの話を織り交ぜながら聖書から学んでみたいと思います。

なぜかと言えば、「ロビンソン・クルーソー漂流記」という本は、クルーソーがどういう過程で信仰を深め、悔い改めにいたったかという、信仰の本であり、証しの書物であると思ったからです。著者のダニエル・デフォーはクルーソーにこう言わせています。

(私は自分のおかれている立場に対して、暗い見通ししかもつことが出来なかった。
私がこの島に漂着したというのも、もとはといえば、猛烈な暴風にいわゆる押流されたからであった。それも、よくも流されたと思うほど予定の航路から流されていた。つまり、これでは、この絶海の孤島で一人ぼつんと死んでいけということではないのか、これが天の配剤というべきものか、と私は独り思わざるをえなかった。こう考えると涙があふれでて頬を濡らすのであった。私は自問自答した。何故神はこうも徹底的にその被造物をほろぼそうとするのか、なぜこんな悲惨な目にあわせようとするのか、なぜこんなにも救い無きまでに見捨て、暗澹たる気持ちに陥れようとするのか。)

普通の人間がこのような状況に置かれれば、誰でも、こう考えるのは当たり前ではないでしょうか。まして、主に感謝しろなどはとんでもないと思うのも理解できます。むしろ

場合によっては前途をはかなんで自殺も考えられる場面でもあるかもしれません。クルーソーは先ほどの言葉のように大変落ち込んでしまい、神を呪うのです。しかし、ここでクルーソーは、また次のように考え直すのです。
（お前がみじめな境遇にあることはいかにも事実だ。しかし考えてみるがよい。いったいほかの乗組員たちは今どこにいるのか。ボートに乗ったのはお前たち11名ではなかったのか。その10人、今何処にいるのか。なぜその10人が助かり、お前が死ぬということにはならなかったのか。なぜお前だけが選ばれたのか。どんな悪いことでもその中に含まれている良いことを除外して考えてはいけない。またより悪いこともそれに伴っていることをも忘れてはいけないのだ。）

クルーソーはここでは、主におゆだねするということをせず、悪いことでも、その中に含まれている良いことを見るという自分の理性を働かして落胆から立ち直ろうとしたのです。一方、旧約聖書のヨブ記に出てくるヨブは苦しみの中でどうだったのでしょうか。自分の息子や娘が殺されたり、災害にあって亡くなったときも次のみことばのように主に礼拝したのです。

このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝し、そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」ヨブはこのようになっても罪を犯さず、神に愚痴をこぼさなかった。（ヨブ記 1・20～22）

すると彼の妻が彼に言った。「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。」しかし、彼は彼女に言った。「あなたは愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならないではないか。」ヨブはこのようになっても、罪を犯すようなことを口にしなかった。（ヨブ記　2・9～10）

クルーソーも聖書を読み主に全く関心がなかったわけではないのですが、このヨブの信仰の深さには比べるべくもありません。もっとも、勿論ヨブもその後の苦難で落胆し散々愚痴をこぼすのですが、苦しみを主のなせるみわざとし、主から離れることはありませんでした。ヨブの嘆きを聖書から拾ってみましょう。

なぜ、私は、胎から出たとき、死ななかったのか。なぜ、私は、生まれ出たとき、息絶えなかったのか。（ヨブ記　3・11）

死を待ち望んでも、死は来ない。（ヨブ記　3・21）



しかし、ヨブは思い直して次のように祈るのです。

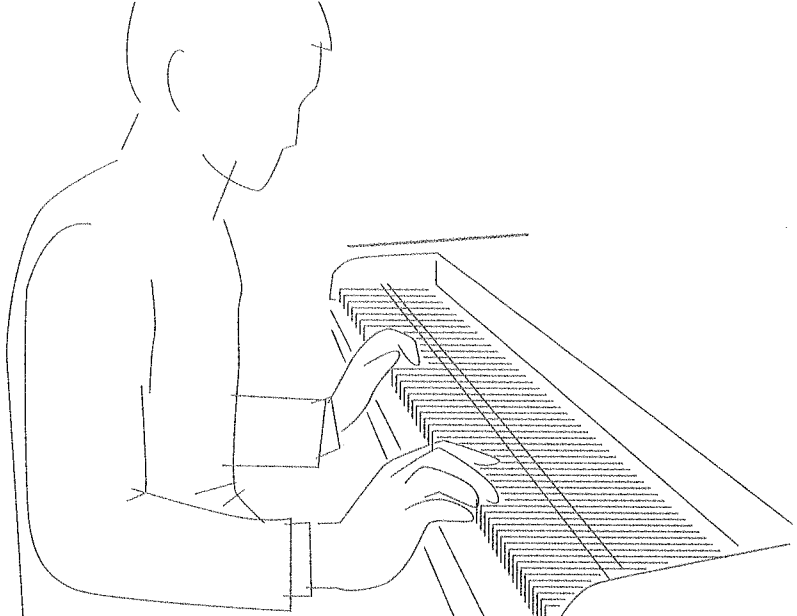
私を砕き、御手を伸ばして私を絶つことが神のおぼしめしであるなら、私はなおも、それに慰めを得、容赦のない苦痛の中でも、こおどりして喜ぼう。私は聖なる方のことばを拒んだことがないからだ。（ヨブ記　6・9、10）

一方、ここまでヨブのことを見てきて、明らかなことは、彼には苦しみのなかでも絶望がまったくないということです。これこそ信仰の真髄であり、彼が主をあがめ主を信じる信仰によって希望を持っていたということではないでしょうか。本当に主を信ずるということは素晴らしいことであることを私達に教えてくれています。

ところで、その後ロビンソンのほうはどうなったのでしょうか。しばらくして彼はこう言っています。

（私が初めこの島について、乗組員がみんな溺れ死んで自分一人が助かっているのを知ったときには、さすがに有頂天になって魂の底から喜んだことは事実である。このときの喜びに、もし神の恵みが加わっていたら、本当の感謝の念にまで高められていたかもしれなかった。しかし、その喜びは線香花火的な喜びに終わってしまった。いいかえれば、自分が生きていることを喜ぶだけで、他の者全部が死んでいるのに、自分だけを助けてくれた、いや、助けようと自分だけを選んでくれた神の御手の特別な恩恵などとはすこしも考えてみようとはしなかったのだ。）
と誠に、正直に告白していますが、神に感謝をしていません。

ところが、しばらくするとクルーソーは病気にかかってしまいます。このときの心境は以前と大分変わっています。
（はげしい高熱のせいもあるが、同時にはげしい良心の呵責のせいもあったろう、私は思



わず祈りに似た言葉を口走った。しかし、それは願望や希望のこめられた祈りなどではなく、心からなる恐怖と絶望の叫びともいうべきものであった。頭は混乱していた。罪の恐ろしさにも、またかくもみじめな姿で死んでいくことの恐ろしさにもたえられず、私の心はただ暗く、不安にさいなまれていた。私は叫んだ。「主よ、私はなんというみじめな人間でしょう。病気になれば看護してくれる者もなく、ただ死んでいくよりほかはありません。いったい私はどうなるのでしょうか。」それから叫んだ。「主よ、私を助けてください。はげしい苦しみにさいなまれている私を助けてください。」と言い、此れが若し祈りといえるものなら、これこそ、永年の生涯を通じて私が神にささげた最初の祈りであった。)

と言っています。この気持ちは手にとるようにわかります。

ロビンソンはヨブほどの、信仰を持っていなかったので、苦しみのなかで絶望したのでありましょう。普通の人間なら皆同じ考えになるのではないでしょうか。だから、溺れるもの藁をも掴む心境で神に祈ったのでありましょう。

そのあと、治療を試みながら、ようやく聖書を読みはじめたところ、つぎの言葉が目にとまったと言っています。すなわち(なやみの日に我をよべ、我なんじを援けん、しかしてなんじ我をあがむべし。)というところです。

彼はこういっています。

(この言葉は私の場合にじつにぴったりとあてはまった。そして感動した。しかし(援けん)という言葉が空しい響きをもっていた。援けられるということが、当時の私にはあまりにも縁遠いことで、とうてい考えられないことであったからである。)

絶海の孤島にいるのですからたしかに気持ちは分りますが、ここでは、折角みことばが目にはいっても、まだまだ彼は主の御心を理解しているとは言えません。

それから、しばらくは島から救いだされることなんて笑止なことと考えて暗い気持でいたのですが、ようやく実際に自分が体験した救いのほうを無視していることに気がついたのです。そしてこう考えたのです。

(お前は病気から奇しくも救われたのではなかったのか。最悪ともいえる、みじめきわまりない状態から、いやお前にとってはまさに恐るべき状態から救われたのではなかったのか。それにたいしてどれだけの関心を示したのか、自分の当然なすべきことをなしたのであるか。神はたしかにお前を援けたが、お前は神をあがめていない。つまり、援けられたのに援けられたとも思わず、感謝もしていない。それでいてどうしてもっと大きな救いを期待することができるのか、と。私はなにかひどく心をうたれた。すぐにひざまずいて、病気から救われたことを感謝した。)

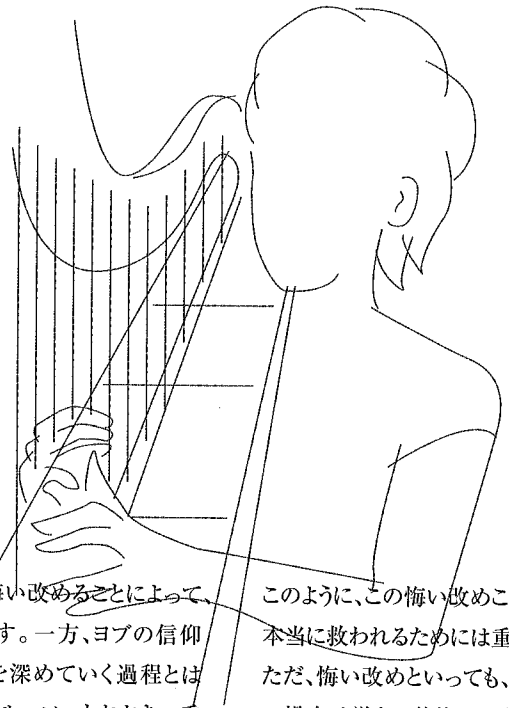
彼が悔い改め、本当に主を崇めるようになったのはそれからです。

(朝のうち、聖書をとりだして、まず、新約聖書のほうから本気になって読みはじめた。これからは毎朝毎晩しばらくのあいだでも時間があれば聖書を読むことにきめた。それも何章ずつ無理にきめるのでなく、聖なる思いがつづくかぎり、読むことにした。この日課をまじめにはたすようになってまもなく、今更のようにこれまでの自分の生活が罪深いものであることがひしひしと感じられるようになった。前にみた夢のことが思い出され(こういういろんな目にあっても、お前はまだ悔い改めようとはしないのか)云々という言葉が激しく私の心によみがえってきた。私は真剣に、われに悔い改めの心をあたえたまえと神に求める気になった。と、そのとき、その日の日課として読んでいた聖書のなかに、これこそ摂理の働きというほかはなかったが、つぎの句があった。「主は君とし救い主としてあげられたまひ、悔い改めと罪の赦しとをあたえたまう」

私は、聖書をなげうち、両手をあげ、心また高められるがままに、喜びにあふれ、声高く叫んだ。「ダビデの子、イエス。キリストよ。わが救い主にして主なる神よ、願わくは悔い改めを我に与えたまえ」これが、私の全生涯を通じて、ほんとうな意味で神に祈ったといえる最初の祈りであった。なぜなら、このとき、私は現在の自分のおかれた状態をみつめながら、しかも神のみことばにはげまされた、ほんとうに聖書的な希望の念につらぬかれて初めて祈ったからである。このとき以来、神が私の祈りを聞いてくださるという希望をいだくようになったといえよう)

ダニエル・デフォーの信仰にたいする考え方が、クルーソーの思考のプロセスを通して非常に明確に私共に伝わってきます。

クルーソーは絶海の孤島で一人ぼっちになっても、自分の思いで生きようとするのですが、孤独のなかで、病に侵され、人生に絶望するものの、聖書を通して神に対して自



分の罪深さをさとり、悔い改めることによって、完全に救われるのです。一方、ヨブの信仰はクルーソーが信仰を深めていく過程とはかなり異なりますが、クルーソーとおおきい重要な共通点があります。それは、いずれも『悔い改めた』というところです。あの信仰深いヨブも厳しい苦難の中で嘆き苦しんだ挙句、次のように悔い改めるのです。

ああ、私はつまらない者です。あなたに何と口答えできましょう。私はただ手を口に当てるばかりです。一度、私は語りましたが、もう口答えしません。二度と、私はくり返しません。
(ヨブ記　40・4,5)

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。(ヨブ記　42・5,6)

このように、この悔い改めこそが、主に喜ばれ、本当に救われるためには重要なことなのです。ただ、悔い改めといっても、ヨブやクルーソーの場合は単なる後悔ではありません。今までの自分の思いでの行動を180度改めて、主の前にへりくだり、主の御心に従った生きかたをしようと決心したことであります。このことが重要なのです。聖書は次ぎのように言っています。

神である主の御告げ。悔い改めて、あなたがたのすべてのそむきの罪を振り捨てよ。不義に引き込まれることがないようにせよ。
(エゼキエル書　18・30)

あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。
(エゼキエル書　18・31)

ヨブもクルーソーもそうでしたが、人間は誰しも苦難に会った時、あの事がなければとか、なぜこんな苦しみにあわねばならないのかと他人を恨んだり、神を恨んだりして神の前に悔い改めがなかなか出来ない傲慢な態度をとりがちです。

しかし、主はそのような考えを持つことは滅びる、つまり主の御心に反するものだとみことばは教えているのです。

よって、冒頭のみことばのように、主は全てのことが御出来になるのですから、私達はなにも思い煩わずに主のまえに本当の意味での『悔い改め』を行い、主のまえに全てをおゆだねする決心をすればよいのです。そうすれば、主は苦しみと同時に脱出の道も用意して下さいます。

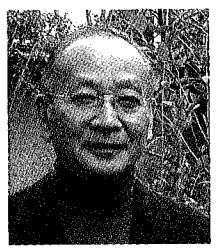
現に、ヨブもクルーソーも悔い改めた結果、大いなる祝福を主から与えられました。
悔い改めは主にとっては次のみことばのように素晴らしいことなのです。

主が彼の上にもたらしたすべての災いについて、彼を慰めた。主はヨブの前の半生より後の半生をもっと祝福された。
(ヨブ記　42・11,12)

今回は、聖書とロビンソン・クルーソーを通して『悔い改め』の重要さを学びました。私達も、これからの歩みの中で苦しみにあっても、絶望したり人生を諦めたりせずに、主をあがめ、自分の思いで行動することから、主の御心に従うことを決心することが、本当の意味で救われ、主の祝福を得る最も近道であることを覚えました。このことを主に感謝し、最後にみことばを読んで終わります。

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招きいれてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。(1ペテロ　5・10)

悔い改めなさい、天の御国が近づいたから。
(マタイ　4・17)



古川卓
1934年静岡県浜松市に生まれる。
慶応義塾大学法学部法律学科卒業
黒田精工株式会社代表取締役社長を経て
現在相談役
日本フルードパワー工業会会長を経て
現在理事

イエスさまの贈り物

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。
(エペソ　2･8)

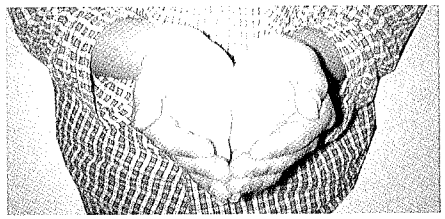
私たちイエス･キリストを信じる者は、神様から義と認められています。イエス･キリストを信じる信仰により、私たちは義である、すなわち正しいとされるのです。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト･イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。(ローマ　3･23、24、28)

神様が私たちを義と認めてくださる、すなわち正しい者としてくださる――それは私たちにとって大きな喜びに違いありませんが、その意味をよく考えてみると、なんだか空恐ろしくさえなってきます。神様が義と認めてくださる私たちとは、いったいどのような者なのでしょうか。うぬぼれが強く自己中心で、他人をさばき他人に嫉妬する。そして自我を通すためなら他人に敵対し、他人を排除し、他人を犠牲にすることもいとわない。それは自分自身でさえ目を覆いたくなるような自分、自分自身でさえ許せないようなこの自分です。

ただ、このように言うと、自分自身を大変厳しく取り扱っているように聞こえますが、私たちは四六時中そのように自分自身を厳しく見つめているのでしょうか。人間はとかく自分に甘く、自分を善く見せたがるものです。自分の悪い考えや邪悪な思いを人前で隠します。また表に出せない自分の過去を隠します。自分の欠点や弱点を極力知られないように努めます。他人が自分について買いかぶっていることはそのままにして敢えて打ち消さず、人によく思われたいと自分を繕います。その結果、そうしているうちにいつしかこの欺きは、他人に対してというより自分自身に向けられ、自分をごまかしてしまいます。本当の自分から自分自身を目隠ししてしまうのです。そして自分も「そう捨てたものでもない」と錯覚してしまうのです。人間は、自分で考えているより、本当はずっと悪いものです。そんな人間を神様は、なにもかも承知の上で、義と認めてくださるのです。

神様の前で私たちは、隠すことも、偽ることも、まして欺くことなど絶対にできません。私たちの創造者、全知全能の神様の目は、何ものによってもゆがめられることはありません。神様は私の真の姿を知っておられ、私自身が気付いていない心の中の腐敗をも、神様は知っておられます。そのようになにもかも承知の上で、そんな私をも義としてくださるのです。



それはいったい何故でしょうか。それは神様からの一方的な恵みとあわれみです。ご自分が創造された人間に対する神の愛です。しかもこの神の被造物である人間は、創造者たる神様に背を向け、その結果堕落し、どうしようもない悪を抱えた罪人です。その罪の人間が、罪の性質ゆえに永遠の滅びに向かってまっしぐらに突き進んでいるのをあわれまれて、神様は救いの道を開いてくださいました。神の愛は次のようにして現わされました。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。(1ヨハネ　4･9、10)

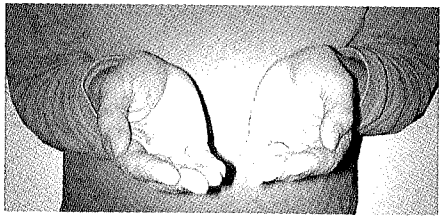
私たちが罪人であるにもかかわらず、このように神様の愛を自分のものとしていただくことができるのは、私たちがその神様の愛を知り、それを信じ、そしてその神様の愛に感謝をもって応えること、すなわち、信仰によるのだ、と聖書は言っています。ではその信仰はどのようにして持つことができるのでしょうか。信仰を持つかどうかは、人間ひとりひとりの自由意思にまかせられていると言われます。しかし私自身自分のことを振りかえって見ると、私が信仰を持つことができたのは、自分の自発的な意思などではなくて、それも神様のあわれみであったとしか思えないのです。

考えてみると、それまでの私は徹底した無神論者で、頼れるものは自分しかない、だから人生は一にも努力、二にも努力、という考えに凝り固まっていました。またそのように歩んできたそれまでの人生で、私を取り巻く環境は比較的平穏で順調ともいえるもので、特に神様に頼らなければならないような苦難に出会ったわけでもありませんでした。

さらに悪いことには、世の中には悪い人間はいっぱいいるけれど、自分はそんな悪い人間ではない、どちらかといえば善い人間に属する方だ、と思い込んでいたことでした。

そんな私でしたが、そんな私をもイエスさまは愛してくださっておりました。そんな私にイエスさまは静かに近寄ってくださり、そして忍耐強く私をやしない、導いてくださったように思えます。

神頼みするほど弱い人間ではない、また



その必要もない、それに自分は善人だ…そのように思い込んでいる傲慢な私でしたが、イエスさまは少しずつそんな私の目を開いてくださいました。私自身の無力さ・心の醜さ・自分勝手さなどに光をあて、自分の力ではどうしようもない真の自分自身の姿を知らせてくださいました。この主の導きによって私は当キリスト集会に集い始めました。今から9年前のことです。

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。(エペソ　1・5～7)

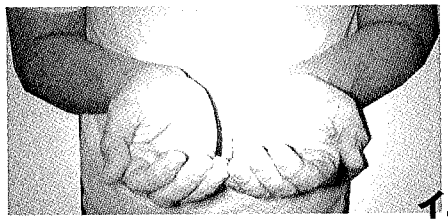
神様は、このようにお選びになったひとりひとりに計画を持っておられます。またその計画を実行するためひとりひとりに生きて働いてこられました。そして今も働いておられます。神様がアブラハムに持たれたご計画は、彼をして全世界の信仰の父にしようということでした。神様は彼に言われます。

「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」(創世記　12・1)

こうして75歳になって家を出たアブラハムに、その後主は再び臨まれ、彼の子孫が天の星の数のように増えることを約束されます。年老いたアブラハムには、まだこの時ひとりの子どももありませんでした。しかし彼は主の仰せを素直に信じます。主はそれを義と認められます。

彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。(創世記　15・6)

主はついに百歳のアブラハムに、90歳の妻サラによって息子イサクを与えらます。イサクは両親の愛情と期待の中に順調に成長し、これで一家の繁栄も固まったかと思われた矢先、主はアブラハムを試練に会わせられます。それは**「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを……全焼のいけにえとしてわたしにささげなさい。」(創世記 22・2)**という神様の仰せです。信じられないような恐ろしい命令であるにもかかわらず、アブラハムは主の仰せに素直に従って翌朝早くろばに鞍をつけ、息子イサクを告げられた場



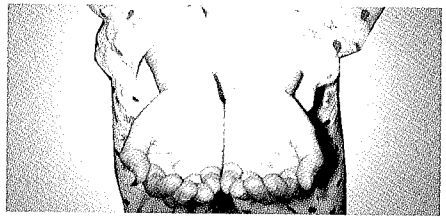
イエスさまの贈り物

所に連れて行きます。そしてイサクを縛り、たきぎの上に置き、刀を取って自分の子をほふろうとします。しかしこれは、アブラハムの信仰をいっそう確かなものとされるための神様の試みでした。まさにその時、アブラハムの手を止められた神様は仰せられます。

「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」(創世記　22・16～18)

こうしてアブラハムは、その信仰により義と認められ、やがて全世界の人々の信仰の父と呼ばれるようになります。アブラハムに比べれば比較にもならない小さな私たちですが、そんな私たちにも、神様はひとりひとりにご計画を持って臨まれます。前述のような事情でキリスト集会に集い始めた私ですが、ここには私がそれまでに経験したことのない「なにものか」があることがわかりました。そしてその「なにものか」とは、私がそれまで経験したことはないけれど、自分でも気付かないまま無意識のうちに心の奥底で求めてきたものでした。うまく表現できませんが、それは万物が揺れ動くこの世界にあって、何物にも動かされることがない絶対的な尺度、とでも言うべきものでした。

しかし当時の私には、イエスさまの「十字架」の意味がまだよくわかりませんでした。そのような私に神様は一つの試練を与えてくださいました。それは30歳を少し過ぎた長男の発病でした。このとき私たち夫婦は本当の意味で「祈り」ということを教えられました。それは、いわば神様との対話でした。聖書を初めて真剣に読み始めました。また神様に問いかけ、訴え続けました。神様はそのひとつひとつに答えてくださいました。このような不幸が起こるのは自分の罪のせいではないこと、自分の罪はすでに全部赦されていること、そのためにこそイエスさまが十字架にかかって死んでくださったこと。そのイエスさまとともに古い自分は死んでしまって、今の自分は新しく生まれ変わったものであること。イエスさまは死後三日目によみがえられて、今も私の中に生きて働いていてくださること。私にも永遠のいのちが約束されていること。私の家族の救いも約束されていること……神様は、



あるいは聖書を通して直接に、あるいは集会の方々のメッセージを通して、あるいは集会の方々との語らいを通して、そのような一つひとつを私に納得のいくように示してくださいました。

息子の病気は、私から腎臓の一つを生体間移植するという道を与えられ成功しました。この1月で手術から丸6年になります。しかしあの時あの試練の中にあって、あのように平安で感謝と希望を持って日々迎えることができましたのも、今から考えると、信仰を持ち始めたよちよち歩きの私どもをきたえるために備えられた、主からのあわれみと恵みのご計画にほかなりませんでした。

このように神様のご計画はしばしば厳しい試練が伴うものです。それは、多くの試練を経験することによって、私たちがイエスさまの苦しみの幾分かにも与り、そこから忍耐と他人への思いやりを覚え、それらを通して私たちが少しずつ聖められ、そしてイエスさまに似たものへと変えられていくためです。言いかえれば、それは、私たちが自分の中から古い自分を追い出して、私たちの中に住まれる主が働いてくださるため、主の通りよき管となるためです。このことを知った私たちは、たといどんな苦しみや悲しみの中にあっても、パウロとともに次のように主を賛美することができるのです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。(ローマ　8・28～30)

その栄光とは、私たちがイエスさまと一つになって、天の御国を受け継ぐ者となることです。永遠のいのちをいただいて私たちは、イエスさまとともに天国に凱旋し、神の栄光をほめたたえる者となることを、神様は約束してくださいました。

時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。このキリストにあって、私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。(エペソ　1・10、11)

イエスさまの贈り物

神様の約束は決して破られることはありません。イエスさまご自身次のように言っておられます。

わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。(ヨハネ　6・37、40)

このように数々の恵みを神様からイエスさまから、すなわち主からのプレゼントとして、私は与えられました。それらは――

第一に、主は無条件で私を愛しておられる、ということです。どのような罪に汚れていても、そのままの私を愛しておられます。そしてすべての人がその愛を知ることを望んでおられる、ということです。

第二に、主を信じ主を受け入れた私の罪はすべて赦されている、ということです。私の罪についての主の赦しは、すべての罪をカバーしています。それは過去、現在、未来におけるすべての罪、さらに自分自身でさえ気が付いていない隠れた罪すべてです。そして主はもはやどの罪をも私につきつけられることがないということです。

第三に、主が私の人生に対する計画を持っておられる、ということです。そして主が、私に起こってくるすべてのこと(それが一見よいことであろうと、悪いことであろうと)を働かせて、私のために最善をなしてくださる、ということです。

最後に、主がこの上なく忠実なお方であること、そして聖書の中で私たちになされたあらゆる約束を守られるお方である、ということです。ですから、再臨のとき、主ご自身が天から下って来られ、私たちは雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うこと、このようにして私たちは、いつまでも主とともにいること(1テサロニケ4・16～18)、私たちは天の御国を受け継ぐ圧倒的な勝利者になることが、確信できるのです。



青柳　惇
1938年京都生まれ。桂高校、京都大学法学部卒、東京銀行取締役退任後、ソデックスコーポレーション社長・会長を経て2002年退職。
著書「若い日に創造者を覚えよ」



人知をはるかに越えた愛。私が聖書のことばに対してはじめて目を開かれるようになったのは、この聖書に書かれている愛について知らされたときだったと思います。

私は大学生のとき、大きな病気を患いました。大きな手術を2度受け、入院生活は10ヶ月以上続きました。この入院中に、私は友人を通して聖書に書かれているイエス様の愛について知らされたのです。

貧しい者は幸い

「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国にはいるのはむずかしいことです。まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」（マタイ　19・23、24）

これは、イエス様が弟子たちに語られたことばです。当時、裕福であることは神に祝福されている証拠と考えられていたようですから、弟子たちが、「それでは、だれが救われることができるのでしょう。」（マタイ　19・25）と驚いたのも当然です。

聖書には次のようにも書かれています。

「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものですから。」（ルカ　6・20）

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇　34・18）

貧しい者はなぜ幸いなのでしょうか。それは、神の国がその人のものだからと書かれています。また、心の打ち砕かれた人――心が打ち砕かれることはとてもつらい経験だと思いますが――には、神様はその人の近くにいてくださると書かれています。裕福な人は、自分の富を誇ったり、あるいは、それを守ったり用いたりすることに関心が向いてしまって、自分が貧しい者であること、本当の富を持っていない者であることに気づきにくいのではないでしょうか。このことが、裕福な人が救われるのは難しいと言われている理由のひとつだと思います。

私自身のことをふりかえってみても、学生時代にイエス様に出会うことができたのは、健康や日常生活の中での楽しみといった富が、病を通して取り去られ、貧しい者にされたからではなかったかと思います。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

苦しみにあうことは、それ自体は、つらい、ありがたくない経験ですが、実はそのときこそ、真の希望、心からの喜びを持つ者とされるのに最も近いところにいるのです。

罪の問題

苦しみを通して、私たちは、自分の持っている罪の問題に気づくきっかけを与えられるのではないかと思います。順境にあるときには、なかなか罪の問題に気づきませんし、たとえ、気づいたとしてもそれを心の片隅に押しやって生きていくことができるのではないでしょうか。けれども、苦しみにあうとき、自分の罪の問題をどうでもいいものとして扱うことは、さらに苦しみを増す結果となります。そして、この罪の問題と真剣に向き合うことこそ、本当の解放を経験するためにどうしても必要なことです。

「内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」（マルコ　7・21～23）

外面的に見て罪がないように見えても、罪は厳然と存在します。うそ、意地悪い心、傲慢、自分を正しいとし人を裁く心、ねたみ、欲望……。これらはすべて罪の結果です。そして、この罪とは、人を神様から引き離し、人からいのちを奪い、この世に破壊的な影響を与えている原因そのものであると聖書は言っています。

聖書に示されている愛

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をね

たみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。(1コリント　13･4～8)

ここに示されている愛の性質をひとつひとつ見ていくと、愛とは、罪とまったく正反対のものであることがわかります。自分の内側を正直にみつめるとき、このような愛が自分に全く無いことを認めざるをえません。確かに、私自身は、これらを行える者でありたいと願っていますし、そのようにふるまえることがあるかもしれません。けれども、それは状況や環境がそれを許しているからにすぎませんし、そのふるまいの動機まで突き詰めて考えると、愛とはほど遠いものであることに気づかされます。私は、闘病生活の中でも自分の醜さをいやというほど見せられました。入院生活では、その自分自身の醜さから目をそらしてごまかしてくれるような楽しみや忙しさはなかったので、それとじっと向き合わざるをえませんでした。

この第一コリント13章に示されている愛は本当にすごいと思います。このような愛の方であるイエス様の前に出るとき、「私は罪人です」と認め、ひれ伏さざるをえなくなります。

愛については、聖書の中に次のようにも書かれています。

私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。(ローマ　5･6～8)

イエス様が十字架にかかってご自分のいのちを捨ててくださったのは、本来私たちが受けるべき罰を、身代わりに受けてくださるためでした。私たちは、自分の罪の問題に目が開かれるとき、イエス様の十字架にしか救いがないことを認めざるをえなくなります。自分には解決され、処理されなければならない罪があることを知らされるとき、また、その罪は自分の力で償うにはあまりに大きすぎるので、自分の力で解決する望みがまったくないということを知らされるとき、十字架にしか救いはないことを知るのです。

希望は失望に終わることがない

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(ローマ　5･3～5)

患難は、やがて希望を生み出し、その希望は失望に終わることがないと書かれています。その理由は、私たちが愛されているからです。この愛の驚くべきところは、私たちの側に愛される理由がまったく無いのに、イエス様は私たち一人一人を愛してくださるということです。つまり、この愛の根拠は、愛を受ける私たちの側にではなく、愛してくださるイエス様の側にあるのです。私たちがまだ罪人であったときに、イエス様は私たちのためにいのちを捨ててくださったのです。

私たちは決して変わることのない愛で愛されています。ここに希望が失望に終わることのない拠り所があります。愛される資格が私たちの側に必要であれば、私たちはそれを失わないように気をつけなければならないし、失ってしまったのではないかと不安になったりします。たとえば、何か災難が降りかかると、愛される資格を失ってしまって、罰が与えられているのではないかという不安が出てくるかもしれません。ご利益宗教は全部そういうものではないでしょうか。だから、失わないよ

人知をはるかに越えた愛



うに善行に励んだり、お金を出したりしなければなりません。けれども、イエス様はただ一方的な恵みにより私たちを罪の滅びから救い出してくださるお方です。

人が人を評価するとき、評判によって見る目が変わったりというように、自分の目ではなく人の目で見て判断しやすいものであるということを思わされます。また、人は肩書きなど外面的なものにとらわれやすく、さらに、人の評価は移り変わりやすいものです。それゆえに、人の目を気にして生きると、誇る必要が出てきたり、誤解されたのではないかと恐れたり、自己主張して生きる必要が出てきたりします。そしてそういう自己主張が結果的にもっと惨めな状況をもたらしたりもします。

けれども、イエス様は全然違う目で私たちのことをご覧になっています。イエス様は心の中もすべてお見通しです。そして、その上で愛してくださるのですから、イエス様に対して誇って見せる必要は何もありません。イエス様は、私たちが能力のある人間かどうかや、魅力のある人間かどうかということを問題にされません。イエス様は目に見える行いよりも、動機、心を見られるお方です。自分は正しいという自己主張よりも、素直な悔い改めを喜ばれるお方です。イエス様の求めておられるのは謙遜、つまり、砕かれた悔いた心です。

このようなお方に目をとめて生きていると、罪をごまかして生きることができなくなるのではないかと思います。ごまかし——人に知られなければ——という生き方は、結局その人を不自由にしてしまいます。心をすべて見通しておられる方を恐れ、すべてをご存知の上でありのままの私自身を愛してくださる方の愛が心に注がれて生きるとき、ごまかして生きようとする誘惑から守られ、本当の自由と喜びが与えられます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ　11・28)

私たちはいろいろな不必要なことがらを必要であるかのように思い込み、不自由にされているのではないでしょうか。

自分はできる、とがんばって自己主張して生きる必要はなく、自分の力でがんばって富む者になる必要もなく、自分の頭で理解して悟りを得ようとがんばる必要もないのです。ただ、主のことばの前に静まり、自分の内に良いものが無いことを認めて悔い改め、主の前にへりくだることだけが必要とされています。

死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。(ローマ　8・38, 39)

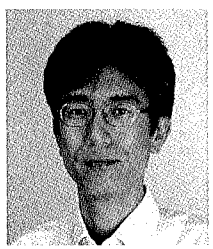
私たちを愛してくださるイエス様は、死に



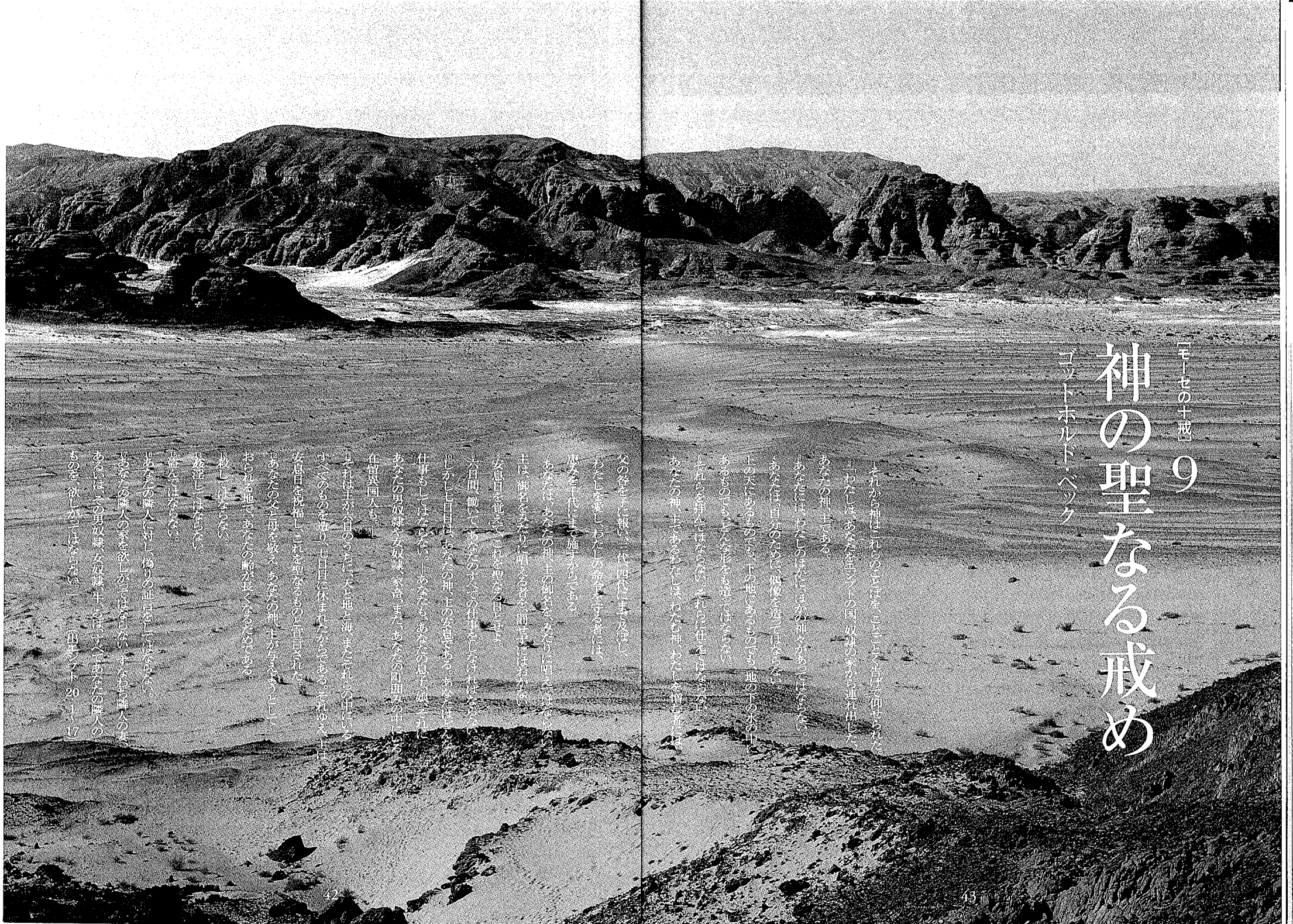
人知をはるかに越えた愛

対して勝利してくださったお方です。すべてを支配しておられ、私たちにとって何が最善かということもすべてご存知のお方です。このようなお方が変わらない愛で愛してくださるのですから、私たちは真の平安と希望を持つことができるのです。

聖書のことばには、生きてはたらく力があります。もし今、苦しみや悩みの中にある方がいらっしゃいましたら、イエス様は、あなたのすぐそばにいてくださっています。どうか、いのちそのものである聖書のことばに素直に耳を傾けることによって、あなたを愛してくださっているイエス様に出会われますようにと心から願っています。



中山　圭二
兵庫県立西宮南高校教諭
学文中、西宮南高、神戸大学理学部卒
大阪大学大学院理学研究科修了



「モーゼの十戒」9

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

1 それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、
あなたの神、主である。
3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。
上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中に
あるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。
あなたの神、主であるわたしは、わたし神、わたしを憎む者には
父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、
恵みを千代にまで施すからである。
7 あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。
主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10 しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな
仕事もしてはならない。―あなたも、あなたの息子、娘、それに
あなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの門囲みの中にいる
在留異国人も。―
11 それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいる
すべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は
安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12 あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとして
おられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13 殺してはならない。
14 姦淫してはならない。
15 盗んではならない。
16 あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17 あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、
あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人の
ものを、欲しがってはならない。」（出エジプト 20 1～17）



これから第七の戒めについて考えてみましょう。

姦淫してはならない。

（出エジプト 20・14）

モーセの十戒の順番には、すばらしい調和が神によって現わされています。それによって私たちは、「神にとって何が大切か」を知ることができます。人間に与えられたもっとも貴いものは主にあるいのちであり、人間生活のもっとも神聖な領域は結婚です。

結婚とは、男と女との間における霊とたましいと肉体との領域での、完全に排他的な、そして生涯にわたる交わりです。

主なる神は、ふたりの間のそのような交わりのために、男と女をお造りになりました。そしてそのために必要な賜物と能力とをお与えになり、神の聖なるみこころに従ってひとつにしてくださいました。

人間の創造は女を造られて初めて完成されました。

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

（創世記 1・27）

神はこのように男と女を創造されました。そして両者はお互いに補いあうことが必要ですが、それは神の姿を反映するという最高の課題を成就するためです。

創造主は、何という高い品位を男と女にお与えになったことでしょうか。

結婚は何と神聖なものでしょうか。このふたりの人間がひとつになることによって、神の栄光が現わされるのです。

新約聖書は、神の神聖なみこころによる結婚のすばらしい模範を、私たちに与えておられます。つまりそれは、「キリストと教会との関係」に比べられます。

なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。

（エペソ 5・23、24、28、29）

なんという実例、なんという愛、なんという一致でしょうか。それはつまり、キリストと教会の関係と同じです。キリストとキリストを信じた人たちとの交わりです。

まことの結婚は、すべて真実で神聖で完全なこの結合を反映すべきです。

結婚とは、主にある楽園の中に、ひとりの男とひとりの女によってしっかりと立てられるべきものです。

それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

（創世記 2・24）

雑婚は罪の結果であり、人類の堕落の結果です。すなわち神は人間と排他的、独占的な関係を持ちたいと切に望んでおられます。主の他に、いかなる神もあってはなりません。そのように主なる神は、男と女の結婚を同じような排他的な関係として定めておられます。結婚した男と女の間に、第三者がはいることは許されません。

結婚は神が人間の手に置かれた最大の神聖なものです。しかし罪深い人間は、結婚をどのような状態にしてしまったのでしょうか。人間は、もっとも神聖な結婚の中に、罪を深く入り込ませ、神聖さを汚し、もっとも不純なものに変えてしまおうとしているのです。

現代の悲劇は、結婚という領域において、もっとも恐ろしい形で表われています。今日、結婚は多くの場合、人間の肉の思いと欲望のはけ口となっています。おのおのは異性との関係において、正しいことと正しくないことの基準を自分勝手に決めています。

また結婚は、今日では、ふたりの人間の個人的な関係だけになってしまって、結婚の形や、その生活のあり方についてはふたりの人間が自由に決定しています。つまり、簡単に同棲したり、勝手に離れたり、というようなことを繰り返しています。そして多くの人は、結婚の前や、結婚の間、あるいは結婚以外の関係においてさえも、自分自身の考えで肉欲の思うがままに行動し、それが当然の権利であるかのようにふるまっています。主なる神が支配しないところでは、人間の情欲のみが支配するのです。

もっとも恐ろしいことは、罪がもはや罪と呼ばれず、また罪と思われなくなることです。多くの人は、結婚において忠実であることは時代遅れだ、と思っています。人はしばしば神の戒めにさからいます。姦淫することは許されているし、姦淫すべきである、と平

気で言うようになっています。

世界各国に見られる大変な数の離婚は、この事実を雄弁に物語っています。

「姦淫してはならない。」という戒めは、ただ単に結婚している人にだけではなく、未婚の人にも向けられています。

大部分の結婚の悲劇においては、夫婦の間に未婚の女性や未婚の男性が入り込んでくることが原因になっています。

現代、若い女性は家庭から出て、職場で積極的に男性と共に働いています。しかし時にはそのことが、肉の欲のきっかけとなる場合があります。また多くの男性も、情欲のとりこになっています。そしてそれによって、自分の意思に反して、たましいが毒されてゆくのです。悪魔が織り成す細い糸は若い男女を陥れます。最初はお互いに心と心とが通い合う友情、友達関係だったのが、知らず知らずのうちにとんでもない関係に発展してしまうことは少なくありません。「火遊びは火事のもと」と言われている通りです。悪魔は情欲という餌を使えば、人が簡単にわなに陥ることをよく知っています。なんと多くの信者が、そのような誘惑によって、毒され、破壊され、用いられなくなってしまっていることでしょうか。

私たちはもっとも小さな誘惑でさえも、決して軽く考えてはいけません。大部分の信者がどうして誘惑や攻撃に負けるかと言いますと、自分は大丈夫だと思い込み、聖霊の警告に耳を傾けようとしないからです。

ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

(1コリント 10・12)

悪魔は嘘つきで詐欺師です。悪魔は信者が罪をいけないことだと思わないように欺き、むしろ何かすばらしいものであるかのように思わせます。そして悪魔は、誘惑や攻撃が成功して信者がわなに陥ると、今までかぶっていた仮面を脱いで恐ろしい正体を現わします。惑わされた者がなぜこんなことになってしまったのかわからないほど、悪魔の手口は巧妙です。

イエス様は、人間の心を完全にご存知です。主はたましいの救い主であり、人間、とりわけ信者たちをみことばによって罪に惑わされないように警告し、危険な道から守ろうとなさいます。

主イエス様は姦淫の始まりを、次のように私たちに示して注意しておられます。

「『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」

(マタイ 5・27、28)

イエス様は、姦淫のほんの小さな兆候に対してさえも、何と厳しく重大なものと考えておられることでしょう。それはちょうど大きく危険な病いの初期の、ほんのちょっとした兆候と同じです。はじめはどんなに小さいものであっても、罪は罪、病いは病いであり、それが人間を滅ぼすことは、誰もが知っています。

姦淫と不品行の罪を、聖なる主は我慢なさることができません。個人の心の中においても、教会の中においても、主は不品行を赦すことがおできになりません。ですから聖書は、初めから終わりまで、非常に厳しく姦淫の罪に対する罰は、「神との交わりから締め出されることである」と、警告しています。

旧約の時代には、不品行を行なう者や姦淫を犯す者は、イスラエルの民から追放され、死刑に処せられました。

人がもし、他人の妻と姦通するなら、すなわちその隣人の妻と姦通するなら、姦通した男も女も必ず殺されなければならない。

(レビ 20・10)

新約聖書もまた厳しく戒めています。

あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。　(1コリント 6・9、10)

ここで姦淫をする者は、盗む者や酒に酔う者といっしょに考えられています。「**だれでも情欲をいだいて女を見る者は、(あるいは、情欲をいだいて男を見るものは、)すでに心の中で姦淫を犯したのです。(マタイ5・28)**」という、イエス様のみことばを思うとき、私たちは恥じ入らざるを得ません。

犬ども、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行なう者はみな、外に出される。

(黙示 22・15)

ここには、「外に出される」と記されていますが、その外にいる状態は永遠に続きます。不品行な者は、人殺しとともに新しい地から追い出されます。第七の戒め、「姦淫してはならない」に反した場合ののろいと罰は、大変厳しく重大なものです。姦淫と不品行は、自分のからだに対して行なわれる罪ですから、その結果は重大です。不品行の結果は家族、次の世代、ひいてはその国民全体に対する罪となります。今日多くの国民は堕落してしまっていますが、その堕落の原因をよくたどってみると、ひとりひとりの隠れた罪が、国全体を堕落させた原因となっていることがよくわかります。

姦淫と不品行を行なうことは、主なる神の聖なる戒めに対して、とりわけ重大な罪を犯すことになります。人間は不法な手段を使ってでも、どうしても欲しいものを手に



入れようとします。すべての不純は、結局結婚を破壊するものです。

今日若い人たちの間で、肉体的に親しい関係になることが何でもないことだ、と考えられているということは、実に恐るべきことです。結婚の前に、すでに若い男女が多くの性的な関係を持っている割合が決して小さいものではないということは、多くの医者が認めている事実です。

また、はじめは小さな割合であった婚前交渉は、今日では当然のことと思われています。もちろんこれは若者のせいだけではありません。それに対して、はっきりとした態度を若者に指導したり、忠告したりする大人たちや教育者が少ないのです。何が正しく何が正しくないか、何が清く何が不純であるか、何が神聖で何が神聖でないかを判断する基準が、若者に正しく教えられていません。

信者でさえも正しい基準を知らず、罪の妥協の中に生活しているなら、正しい判断、基準を若者に教えることがどうしてできましょうか。多くの場合、若者は罪の深みに入り込む前に、清くありたいという必死の戦いをするのですが、大人の助けがないためにだめになってしまうことが少なくありません。

私たち信者は、自分の国民の道徳的堕落の罪に対して、大きな責任を負っています。私たち信者は、テレビや雑誌、映画などのマスコミの悪い影響に対して、また一般世論の堕落に対して、正しい判断基準を示し、第七の戒めを尊重するように努力しているのでしょうか。

多くの人は、時代遅れで、心の狭い者だと思われたくないばかりに、あえて上に述べたことを行ないませんでした。

私たちは、テレビ、または映画などに出ている、非道徳的なものに対して、黙っているべきでしょうか。

また、今日の流行というものは、意識的か、無意識的にか、罪の誘惑をもたらすばあいが多いのですが、人々は流行だからと言ってその影響をあまり真剣に考えようとしません。

ご婦人は、意識しないで、性的な魅力のある服を身にまとったりしますが、男性は、その姿を見て情欲をかきたてられ、罪の誘惑に陥りがちです。

隣人の家に火をつける者は、放火魔とし

て罰せられます。しかし、隣人の心に情欲の火をつけるものは法律上は罰せられません。しかし、神の前には有罪です。

私たちが生きている上でのもっとも悲しいできごとの一つは結婚が悲劇的状態になっていることです。その行きつく果ては離婚です。その苦しみは測り知れないほど大きなものです。それはいわば「罪の大海」のようなもので、隠れたところでどれだけ涙が流され、心が傷つけられ、愛が踏みにじられ、多くの妻や夫や哀れな子どもたちの悩み、痛みとなっていることでしょうか。神の聖なるみこころが、どれだけ軽く考えられ、踏みにじられ、無視されていることでしょうか。

今日この問題については、多くの教会もまたこの世と妥協し、離婚もやむをえないとか、離婚後の再婚についても簡単に考えられていることが少なくありません。

聖書によると、結婚は死ぬまで分かたれることのないものであり、死んだときに初めて結婚の戒めから解放されるものです。

「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。」

(マタイ 5・32)

また、聖霊は使徒パウロを通して、次のように語っておられます。

夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとい他の男に行っても、姦淫の女ではありません。

(ローマ 7・2、3)

新約聖書には、結婚の解体、あるいは無効宣言の意味による離婚は全く存在しません。結婚とは夫と妻が生きている限り解体され得ない、生涯の戒めです。

イエス様は、相手が絶えず姦淫を犯し続け、不品行の罪の中に生き続ける場合、離婚してもやむをえないと例外的に認めておられますが、しかしこの場合においてさえも、別れた結婚生活は、依然として結びつきを持っており、結婚の解体ではないと言っておられます。ですから、妻か夫のどちらか一方が生きている限り、再婚することは、別れた者たちには許されていません。

主なる神のみことばは、私たちの信仰と行ないの、無条件の絶対的な基準ですから、どのような時代にあっても、例外やみことばの歪曲があってはなりません。

主なる神の目は、私たちの生活のもっとも個人的な領域をも、見通すことがおできになります。主なる神は、人々が認めようが認めまいが、歓迎されようがされまいが、厳然として結婚についてのまことの規範を示しておられます。

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

(ヘブル 4・13)

「イスラエル人の全会衆に告げて言え。あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。」

(レビ 19・2)

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

(1コリント 6・19、20)

私たちのからだは聖霊の宮として選ばれているものです。これを考えると私たちに望みが与えられます。なぜならば、たとえ私たちにはできないようなことがあっても、「聖霊にとって不可能なことはない」からです。

聖霊は聖い生活をするための力強い力であり、助け手です。「あなたがたは、もはや自分自身のものではない」と書かれています。私たちのからだは、私たちのものではなく、主なる神の宮、聖霊の住まい、神の聖所なのです。主は私たちを支配してくださって、私たちをあらゆる汚れや不純から守ってくださるのです。

神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。

(1コリント 3・17)

キリスト教からイエス・キリストへ

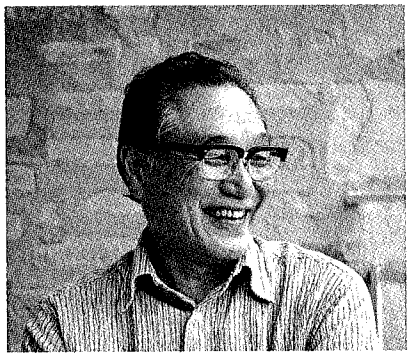
重田 定義

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません。

(詩篇 139・1～6)

主(父なる神様、御子イエス様)が私のような愚かな者をも見捨てずに目を留めてくださり、杖と鞭をもっていかに愛し、導いてくださったかを証しさせていただきます。

私は小学生の頃、父が行っていた教会の日曜学校に通うようになりました。幼年時代の私の中に自然と神様、イエス様が親しく、身近かに感じられるようになっていたのはそのためだったと思います。中学2年になると日本は太平洋戦争に突入し、私の中学でも授業に軍事教練が課せられ、戦況が厳しくなってからはクラス全員が軍需工場で毎日働くという生活が続きました。そのような中で教会は私にとって戦時の暗い世相の中で砂漠のオアシスのような心の安らぎの場でした。やがて、ますます戦争が激しくなり空襲によって東京は焼け野原となり、国民はいよいよ本土決戦を覚悟しました。このような環境の中で私はどうせ戦場に行かなければならないなら殺されることも、殺すこともない軍医になろうと決心して医学の道に進むことにしましたが、入学したその年の8月には終戦となりました。敗戦によってすべての価値規準が変わり、赤い思想が学生の間に広がる中で、私はキリスト者医家連盟に入って他の医学生といっしょに聖書研究や医療奉仕をしていました。その頃山本和という、スイスの神学者カール・バ



ルトの研究者として知られた牧師と出会い、その新鮮で知的な説教に引かれて山本牧師の家の教会に行くようになりました。しかし今思えばそのときの私は山本牧師の神学校の講義のような説教によって知的な満足を得て喜んでいたに過ぎませんでした。その後勧められるままに滴礼による洗礼を受けましたが、イエス様の十字架の贖いのみわざが自分のためであったなど全く感じられないままの、神を恐れぬ形だけの洗礼でした。しばらくして山本牧師が病のため退かれ、その後任として来られた牧師は兼業で忙しく日曜礼拝も守れないことに反発した私は教会を離れましたが、当時の私はこのことによって教会の束縛から自由になったという解放感を覚えただけであり、神様に対する何の呵責も感じないまま、このような生活をその後25年も続けたのです。

学校を卒業した私は、初め3年間小児科を研修しましたが、まだ抗生剤などなかった当時、下痢や結核でどんどん死んで行く子供たちや親の嘆きを見て悩んだあげく、病気にならないうちに予防することこそ必要と思い、衛生学の道に転向しました。そのときは衛生学を選んだのは自分の意思によるものと思っていましたが、今、それは主の導きによるものであったことをはっきり覚えます。というのは衛生学の研究を通して人間がいかに自分の欲望を満たすために神様がお造りになった自然環境や生態系の秩序を破壊してきたか、そしてその報いがいかに私たちの生命を脅かすまでに急速に増大しつつあるかという事実を知るようにしてくださったからです。

妻と結婚したのは衛生学教室に移った時でした。そして9年目に娘まりが与えられました。その頃の私の心はすっかり神様から離れ、食前の祈りさえせず、聖書も本棚の奥にしまい込んでいたような有様でしたので、そのような私を見て、結婚前に私がクリスチャンであると聞いていた妻は内心失望したそうです。私は妻をつまずかせながら、自分は受洗はしているからクリスチャンだと勝手に思っていましたが、実際には聖書にはっきりと記されている神様のみこころを何一つ知らない、名ばかりのクリスチャンとさえ言えないような者だったのです。

主はそのような不敬虔で不遜な私をもお見捨てにならず、その後さまざまなことを起こして私の目を開こうとしてくださいました。娘が6才になった頃、妻は体調を崩し、だんだんと症状が強くなり、私の知る限りの名医に診てもらいましたが少しも良くならず、その苦しみはそれから長い間

続くことになりました。このことについては妻が『主は生きておられる』8号の証しで詳しく述べているので、ここでは申しませんが、私は医者として、また夫としてどうしてやることもできない自分の無力さを情けないと思いましたが、霊の目が開かれていない私には苦しんでいる妻にイエス様を伝えようという思いさえも浮かびませんでした。しかし、妻の上に起こされたこの出来事は主が私をご自分のみもとに引き寄せようとして与えられた恵みの試練の始まりでした。

次に私の上に現わされた主の導きは、当時は全くわかっていませんでしたが、1973年、東海大学に医学部が新設され慶応大学から移ったことに始まります。開校してしばらく後、3人の学生が「聖書を読む会」を作りたいから顧問教員になってほしいと言ってきました。彼らはみなクリスチャンでした。こうして私は毎週学生たちと私の部屋で放課後にともに聖書を読み、祈るようになり、集う学生の人数も十数人に増えました。私は浅はかにも教会に行かなくても、というよりこうして学生たちとともに聖書を読み、ともに祈るこの場所こそ教会ではないかと思っていました。またその頃、内村鑑三、矢内原忠雄、塚本虎二などのいわゆる無教会派の人々の著書を読み耽り、聖書の理解こそ信仰の土台であるという偏った考えを持っていました。

ある日「聖書を読む会」の学生の1人がアメリカ人の宣教師を連れて来ました。彼は沖縄戦に兵士として参加したこと、戦後に神学校を卒業し沖縄の人々に福音を宣べ伝えようと日本に来たことなどを話してくれました。別れる日に彼は「あなたの信仰は絵に描くとこのようなものです」と言って、黒板に樹の絵を描き始めました。まず地面の線を引き、その上に葉の茂った大きな樹を描き、次に根を細い線で描きました。そしてこう言ったのです。「あなたの信仰はこの樹のようなものです。ちょっと見ると枝は広がり、葉は茂ってりっぱな樹のように見えますが、少し風が吹くと根が張っていないからすぐに倒れます。あなたの信仰も根がないから試練に会えばすぐに崩れてしまうでしょう。」まさに聖書の知識だけを頭に詰め込んでいい気になっている自分のことをずばりと言い当てられたのです。主はこの宣教師をお用いになって主に結びついていない私の状態を指摘され、悔い改めて主に立ち返るように導いてくださったのです。しかし、愚かにも私には主のみこころがまだわからず、これは神様が教会に戻るようにとおっしゃっていると思い、病気で苦しみ、神様を求めている妻といっしょに25年ぶりに以前出て来た教会に戻りました。牧師はすでに四代目でしたが、私のことを覚えておられた古い信者の方々はたいへん喜んで迎えてくださり、私はちょうど帰って来た放蕩息子のような気持ちでした。古巣に戻った私は熱心に教会に集い始め、やがて役員に選ばれ、牧師が夏休みのときには厚かましくも代わって説教をしたこともありました。しかし、家内の悩みはこの教会では解決されず、かえって増すばかりでした。

1981年春、娘は高校を卒業し、私が勧めたT大学医学部に元気に入学しました。娘を初めて親元から離すことが気がかりでしたが、大学の女子寮に入るので心配ないと自分に言い聞かせ、やがて娘に大きな心の苦しみが襲ってくるなどそのときは予想もしませんでした。しかし主はこのような妻や娘の悩み苦しみを通して私たち家族に働いてくださり、不思議な主のお導きによって初めは妻と娘が吉祥寺キリスト集会に移り、娘はイエス様を主と信じ受洗の恵みに与ることができ、半年後には私も吉祥寺キリスト集会に移ることになったのです。

妻と娘が吉祥寺キリスト集会に移ると聞いた時、まず頭に浮かんだのは、この集会は異端の教会か、あるいは過激的な信仰集団ではないかということでした。もしも危険な宗教団体だったら洗脳される前に妻と娘をそこから連れ出さなければならないと思い、私は自分の目で調べようと自分の教会の礼拝が終わってから吉祥寺集会に偵察に出かけました。ところが何回か通ううちにここでは人間が定めた秩序に従っている教会の形だけの礼拝とは全く違い、神様の秩序に従って神様に心から捧げる礼拝が行われていること、また礼拝後の福音集会では毎回、別の平信徒の兄弟方が行なう説教（集会ではメッセージ）が牧師の型にはまったような説教ではなく、また無教会の教師のように聖書の知識を教えるのでもなく、自分の上に現わされたイエス・キリストの十字架の贖いのみわざによる救いの喜びを、イエス・キリストの救いのメッセージを、救われていない人々に伝えようと聖書のみことばに基づいて熱心に語られているのを聞いて驚き、心が打たれました。私は自分の集っている教会こそが正しい教会だとは思っていませんでしたが、教会とはどこもこんなものだろうと惰性的に考えていました。しかし、ここに全く別の教会があったのです。それはまさに聖書にある初代教会そのままのような教会でした。こんな教会が現代の、しかも東京にあるとは思ってもいませんでした。

妻が吉祥寺キリスト集会に移ってから聖書のみことばをむさぼるように読み、メッセージのテープを夢中で聞き、自分の病気に捕らわれなくなって生き生きと変えられてゆく様子を見て、私にも彼女の肉体は依然として苦しんでいるけれども、霊が生まれ変わり、みことばの力によってどんどん元気になってゆくのがよくわかりました。しかし当時の私は「宗教」としてのキリスト教徒でしかなく、ほかの宗教もあって当然、どんな宗教を信じても自由と思っていたような全く主のみこころに反した者でしたので、宗教としてのキリスト教会に集うことに違和感を感じることなく元の教会で頑張っていました。またそれは長い間離れていた私を喜んで迎え入れてくれた教会に対する人間的な思い、また役員としての人間的な責任感からでもありました。

その私が教会を出てキリスト集会に移る決心をしたのは、毎月行われていた教会の聖書研究会で、ある信者がヨハネの黙示録3章14～17節に記されているラオデキヤの教会について学んだ時のことでした。この時主は私の上に臨んでくださり、霊の目を開いて主に繋がっていない教会の姿をはっきりと見せてくださったのです。この箇所はラオデキヤの教会がいかになまぬるい教会であるかをイエス・キリストが指摘され、悔い改めを求めておられるところです。ようやく目の開かれた私は、これはまさに自分のことを、またこの教会のことを主がずばりと指摘されていると示されてたいへん心が痛みました。しかし、牧師を始め集っていた信者が口々に自分たちの教会はラオデキヤのようでなくてよかったと言うのを聞いて、私ははっきりここを去らなければならないと決心したのです。

集会に移ってから最初の軽井沢キャンプでしたが、集会のある兄弟から突然「あなたは救われていますか」と聞かれました。私が即座に「はい、救われています」と言えなかったのは、自分の罪はイエス・キリストの十字架の贖いのみわざによって完全に赦されているという確信がなかったからでした。主はその兄弟を用いて私がほんとうに救われてはいないということを示してくださったのです。こうして集会に集い、礼拝を守りメッセージを聞き、主にある兄弟姉妹との交わりを続けているうちに主の大いなるご愛とあわれみによって、私は人となられた神の御子イエス様が私自身の罪のために身代わりに死んでよみがえられ、罪の赦しと永遠のいのちを与えてくださるほど私を愛してくださったことをはっきりと示され、神様を離れて全く自己中心に歩んでいた罪を心から悔い改めて主の前にひれ伏しました。これはまさに私の信仰の歩みの始まりでした。そして以前、悔い改めもないまま受けていた滴礼の洗礼は聖書的に意味のないものであったことを知り、妻とともに主を信じた証しとしての浸礼を受ける恵みに与りました。

このような私の上に最大の試練が与えられました。娘の心の苦しみがふたたび大きくなり、1983年娘がこの世を去ったのです。娘の上に起こったことと、この時の私の心境と、それに続いて私たち夫婦の上に起こった奇蹟ともいえる心の平安については『主は生きておられる』8号の妻の証しにも詳しく書いてありますし、『光よあれ』2号の私の証しにも、また娘が天に召されて3年目の記念に出版した福音メッセージ集『私達の国籍は天にあります』の序文にも書いておりますのでここでは省かせていただきますが、主からお預かりしたかけがえのない大切な娘の深い心の苦しみ悩みをわかってやれなかったためにこのような結果を招いてしまったことをただ心の中で泣きながら主に謝りました。そして、主が愚かで愛の足りない私の悔い改めを受け入れてくださったことを、心に与えられた平安と天の御国で娘に再会できる希望の確信によって知ることができ、心から主に感謝するばかりでした。この平安と希望はそれからもずっと続いていますが、このとき私は内から支えてくださっている主の御霊の力を初めて体験したのです。そしてさらに私にはっきりと宗教として人間の作った制度の下に運営され、聖書をキリスト教の経典としてしか用いていないキリスト教会と、いっぽう、生ける神であられる主イエス様をかしらとし、人の手によらず神様の定められた秩序によって御霊の下に一つとされ、聖書のみことばによって生きるキリスト者の集う教会としての集会との歴然とした違いが示されたのです。それは前者は御霊の働かれる余地のない死んだ教会、すなわち、

あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。　（黙示録 3･1）

であり、後者は一人ひとりの信者が直接かしらなるイエス様に結び付いている生けるまことの教会であったのです。このことは救われるたましいの数の大きな違いによっても明白でした。私はこれからの人生を私のような愚かな者をも愛し、ここまで導いてくださったイエス様に従って生きたいと強く願うようになり、それに答えて主は私に娘が召された半年後に我が家で集いを持ち、まだ主をご存じない方々にイエス様だけが私たちの罪を赦すために尊いいのちをお捨てになるほどまでに私たちを愛してくださる唯一の生ける神であることをお伝えしたいという思いを与えてくださいました。家庭集会では主がお働きくださって、これまでに多くの方々がイエス様をご自分の救い主としてお受け入れになり、私たちは主のご栄光を拝して大いに喜び、また力づけられました。



2004年9月、西軽井沢国際福音センターの結婚式茶話会にて。妻 都代子さんと

また大学においては新しい医学研究や医療技術が次々と開発されるに伴い、それを人間に適用することについて医の倫理の必要性が高まり、医の倫理委員会が設置されて私は退職するまでの十数年間、委員長を務めることになりました。遺伝子組み替え、体外受精、臓器移植などの新しい研究や医療について、それらを実際に行うことの是非を審査する上でさまざまな困難がありましたが、主はいつも守ってくださり、私が心の中で主に祈り、「聖書の基準によって判断するとこちらが正しいことになります」と言うと、対立した意見も一致に導かれるという体験を何度もさせていただきました。この間にいわゆる東海大安楽死事件も起こりました。私は倫理委員会委員長として集まった多くの報道陣の前で会見の最後に「私は神を恐れる人間です。人間が神になってはいけま

せん。たとえ患者が積極的に死を望んでいたとしても、神に代わって医師が人命を縮めることは許されないことです」と申しました。これは主ご自身だけが人間のいのちを支配する唯一の権威を持っておられることを私の口を用いて主が語られたのであり、それに対して担当医への同情の声が高かった報道陣から何の反論も出ず、私は生きて働かれる主の御威光を強く覚えました。

1993年の退任に際して私は退任講演の慣例となっている研究業績の披露ではなく、「若き日に汝の造り主を覚えよ――医学・医療の立場から――」と題するメッセージを医学部の全教員の方々の前ですることができました。(その全文は『医者に治せない病気』という本に掲載してあります。)この中で、人間の飽くなき欲望が原因で破綻を来した地球環境や、神の領域を冒すまでに至った医学、医療などに現わされた人間の傲慢に対する、万物の創造主にして生けるまことの神様の警告を語らせていただき、大学での任を終えることができたのも、主がしもべとして用いようと支え導いてくださったからこそと主に深く感謝しました。

定年退任後、主のご用のために専念したいと一切の公の仕事からは身を引きましたが、主のしもべとしての務めには定年はありません。

あなたは、年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている。
(ヨシュア 13・1)

と主がお命じになっておられるからです。その後十余年経ち年を取りいろいろな病のために肉体の衰えを覚え、以前のように各地の集会やキャンプに出向いて主のみことばを取り次ぐ回数は少なくなりましたが、それに代わって主に示されてこれまで何冊かの福音メッセージ集を出版させていただきました。集会の兄弟姉妹方がこれらの本を救いを求めるたましいの所に持ち運んでくださる主にある労はまことに感謝にたえません。主はまた、

あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。(ダニエル 12・13)

というみことばによって、私に終わりまで主に従って歩みなさい。そうすれば天にある私の相続地に立たせようと約束しておられます。このような約束を与えられた私はなんという幸せ者であろうとただ感謝するばかりです。相変わらずたどたどしい信仰の歩みしかできない者ですが、主イエス様のご再臨の日がいよいよ間近い今、御霊の力を注いでいただき、みことばに頼りつつ、少しでも主のみこころにかなうしもべとしてご再臨の日まで天の御国を目指して歩み続けることができるよう、イエス様に祈り続ける日々です。

1927年東京都生まれ。千代田区番町小、府立四中、慶応義塾大学医学部専門部卒。東海大学名誉教授。東海大学医学部教授在任中、同学部「医の倫理委員会」委員長を務めた。『私達の国籍は天にあります』など著書多数。妻 都代子さん。

主のご計画に従って

織田 史彦

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。 (イザヤ 25・1)

私は農家の三男坊として、長野県飯島町で生まれました。子どもの頃から運動が大の苦手で、運動会の季節になると憂うつな毎日が続きました。定番競技の「かけっこ」はいつも最下位、6年生のときは長距離走で最後にゴールインする始末でした。反面、音楽は好きで、体育コンプレックスを癒す貴重な科目でした。中学では同級生の勧めもあって吹奏楽部へ入部、高校からは混声合唱に魅せられて、音楽室にいる時間が教室にいる時間を上回る日々を過ごしました。

「進学は近くの大学ならば」と両親に言われ、特段の志望動機もなく、親友が志望する信州大学を受験、新設の経済学部に入学できました。当時の経済学部は講義数が少なく、空いた時間のほとんどを混声合唱団の活動に費やしました。入団した年は、ちょうど合唱団創立10周年に当たり、ブラームスの「ドイツレクイエム」全曲に取組んでいました。この曲は、すべての歌詞が聖書のみことばを引用しています。

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」 (マタイ 5・4)

万軍の主。あなたのお住まいはなんと、慕わしいことでしょう。 (詩篇 84・1)

主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。
(詩篇 39・7)

御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。」 (黙示録 14・13)

上記のみことばは、その歌詞の一部です。

こうして私は、合唱活動を通して聖書のみことばに触れることになり、また妻との出会いも与えられました。けれども、当時の私は、これらのみことばを単なる歌詞としてしか受け取らず、面倒くさいドイツ語だな、とすら感じていました。2年後には、バッハの「Jesus, meine Freude（イエス様は、私の喜びです）」を歌いました。この曲にも、次のような聖書のみことばが散りばめられていました。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。（ローマ 8・1、2）

もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。（ローマ 8・11）

大へん素晴らしい福音のみことばですが、当時の私は相変わらず歌詞のメッセージを汲み取ろうとしませんでした。この種のいわゆる「宗教音楽」は、他にも何曲か歌いましたが、いずれも旋律と和音を楽しむだけで、歌詞の意味を知ろうとは思いませんでした。

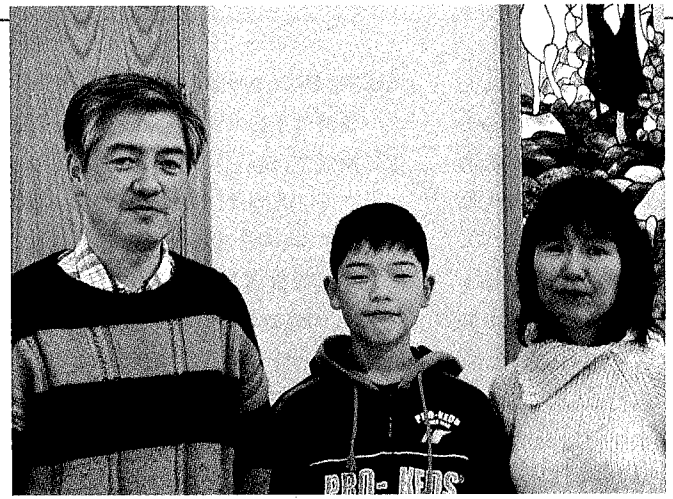
さて、妻と結婚して4年後、待望の子どもを授かりました。前後して、突然妻が「聖書の勉強がしたい」と言い始め、ある宗教団体の聖書勉強会に行くようになりました。話しを聞くと、大学時代の友人に勧められたとのこと、手には色鮮やかな本を持っていました。私はどうしてよいかわからず、見て見ぬふりをしていました。

妻はその後、大学時代の別の友人と話す機会が与えられ、問題を感じはじめていた先の勉強会を離れて、長野の集りに通うようになりました。そして2人目の子どもを授かった後、その集りを出て、現在集っている御代田キリスト集会に移りました。

そんな妻の行動を、私は半ば諦めの気持ちで見ていました。日曜日になると、妻は子どもたちを連れて、うれしそうに御代田へ出かけて行きました。私はいつも独りぼっちでしたが、これ幸いと自分勝手なことをしていました。

妻からは何度も「御代田のキリスト集会へ行きましょう」と誘われましたが、「行ったら宗教にはまってしまう」と思い、抵抗を繰り返していました。毎年、私の誕生日になるとベックさんから「おめでとうコール」をいただきました。しかし、受話器を渡されても、頑として口を閉ざしていました。あとで知ったのですが、ベックさんと私は誕生日が同じでした。

その私が御代田へ出かけることになったのは、やはり音楽を通してでした。御代田に国際福音センターが完成して、妻から「コンサートが開かれるので、聴きに行こう」と言われました。そして、「ヘンデルのメサイアを演奏する」と聞いて、それならと重い腰を上げたのです。



2005年1月、国際福音センターで。左から、史彦さん、長男 恵介さん、妻 仁子さん

福音センターに入ってびっくりしました。どこから集まったのか、と思うほど会堂は人でいっぱい。その中に「どこかで見た気がする」人が何人かいました。頭をひねると、妻の持ってきた『光よあれ』という本に写真の載っていた人だ、と気づきました。皆、にこにこしていて、とても不思議な感じでした。

この時のコンサートは、イエス様から遠く離れていた私が、イエス様に近づくきっかけとなりました。集会の方々の演奏を聴いた私は「なんて下手くそな。よし、私が助太刀をしてやろう」と思ったのです。今振り返ると、本当に恥ずかしい、高ぶりの極みでしたが、この思いは、私が信仰に導かれるために必要な一つのステップでした。それまでの集会アレルギーもいつの間にかなくなり、初めての「ドイツよろこびの集い」が開かれた時も、「テノールの人が足りないから」と言われて、あまりためらうこともなく参加しました。

そして1994年5月、国際福音センターで開かれた「よろこびへのコンサート」でハレルヤ・コーラスを歌った時、イエス様との出会い、という大きなプレゼントをいただきました。イエス様は「声が出ない」と困惑する私に「祈りなさい」と教えてくださり、「どうか声が出るようにしてください」という粗末ながら初めての祈りを、聞き届けてくださいました。妻は常々「困ったら、祈るのよ」と言っていましたが、その意味を体験的に知ることができました。

さらに翌年の正月には、娘といっしょに「洗礼の証し」をする恵みにあずかりました。洗礼槽の上のステンドグラスが、とても印象的でした。

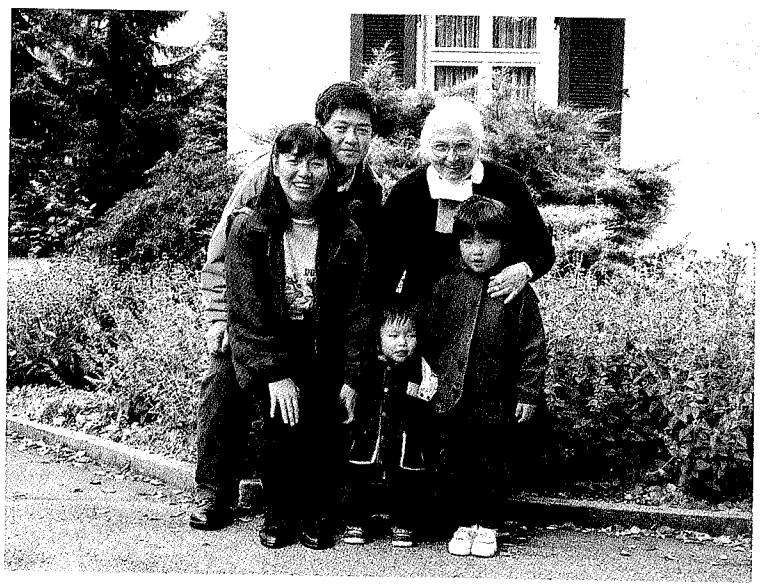
「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」（マタイ 18・3）

信仰の道を歩み始めた頃、ある方から「よかったね。感謝だね。でも、これからの方がもっと大変だよ」と言われました。この言葉は、今の私をみごとに言い当てていました。

私は諏訪市に住んでいた2000年頃から、よくつまづき、よくころぶ、という体の変調を感じていました。長野市へ転勤後も、やはり変だと思って脳神経外科で受診しましたが、「脳外科の領域ではない」との診断でした。紹介していただいた長野日赤病院神経内科でも、様々な検査の末に「異常なし」と言われて、平安のない日々を過ごしていました。

病名がはっきりしたのは2003年春でした。集会でご一緒させていただいている医師から「あなたはパーキンソン病です。間違いありません」と言われ，その後、日赤病院ではっきり診断されました。パーキンソン病は手の震えや歩行困難などが生じる病気で、現代医学で治せない病気の一つです。治療はひたすら薬を飲み続けることで、長期の投薬による副作用のために手術を併用することもあります。

以前の私なら「どうして私が…」という考えがわき上がり、人生の目標を失っていたでしょう。しかし、イエス様はこんな私をも愛してくださり、生きる希望、すなわち「病気に侵されても、できることがある」との思いを与えてくださいました。さらに、音楽を通してイエス様と出会ったことは、臆病な私が病気を受け入れるための「主のご計画」であったことを確信させられました。ひとつひとつ人生経験が積み重なって信仰に至った経緯は、ジグソーパズルのピースがつぎ合わさって一つの絵を描き出すのに似ているな、と思いました。



1994年10月、一番最初のドイツよろこびの集いで。後列、史彦さんとベック夫人ミンヘンさんの妹エミリエさん、前列左から、妻 仁子さん、長男 恵介さん、長女 遥子さん

私はパーキンソン病とわかった時、「ちょっと人より変わった経験ができそうだ」と思ったほど落ち着いていました。それまでの不安は拭い去られ、心の中は平安そのもの、そのような私に変えてくださった主に感謝するしかありません。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。―主の御告げ。―それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」　（エレミヤ 29・11）

いずれこの体は自由を失い動かなくなるかも知れません。それまでの時間は、イエス様からいただいた時間として、愛する家族のために、病気に苦しむ多くの方々のために、そして愛するイエス様のために、祈りながら使いたいと思います。

1960年長野県生まれ。飯島小学校、飯島中学校、長野県伊那北高校、信州大学経済学部卒業。（株）八十二銀行勤務。家族は、妻 仁子さん、長女 遥子さん、長男 恵介さんの4人家族。

祈りを聞いてくださるイエス様

織田 仁子



2004年5月、御代田の国際福音センターを背景にして、よろこびの集いの折に。右端、史彦さんと仁子さん

2004年は、私にとって激動の年でした。専業主婦としてほとんど家にいた者が、約20年ぶりに小学校の教壇に立つことになりました。1年前に主人の病気が判明し、私も仕事をした方がいいのではないかと思っていた頃、大学の友人が声をかけてくださり、これも主の導きかと思って引き受けました。

仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。(ハガイ 2･4)

このみことばに押し出され、自分にはできないけれど、主が共におられて「しなさい」と言われるのであればできるのではないか、と思いました。また、新たに出会う人たちにイエス様のことをお伝えできるのではないか、という望みも持ちました。けれども結果は、多くの方に迷惑をかけ、心身ともに疲れて果てて、数ヵ月で辞めることになってしまいました。

その後しばらく、自己嫌悪の中に埋もれ、唯一誇りに思っていた信仰さえも、もろくも崩れ去っていく気分でした。イエス様を汚すことしかできなかったこの数ヵ月は、一体何だったのか？ すべてをご存知のイエス様が、どうしてこの出来事を許されたのか?と、主に対する信頼を失い、人の目を恐れ、前に一歩も踏み出せない絶望感を味わいました。

そんな暗闇の中にいた時に、次のみことばをいただきました。

あなたがたの悲しみは喜びに変わります。　(ヨハネ 16･20)

「イエス様、私だけでなく、私のせいで悲しんだり苦しんだ人たちにも、どうぞ喜びを与えてください。みことばの通りに、悲しみを喜びに変えてください。私には何もできませんが、よろしくお願いします。」こう祈ることで心の重荷を主に委ねることができ、再び前に一歩ずつ進めるようになりました。

主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。　(詩篇 131･1)

私のすべきことは、「どうして?」と反問したり、とらわれたりすることではありません。今ある自分の姿や現実を、イエス様にあってそのまま受け入れること、そして、たとえ今は辛く思えても、これがイエス様が用意してくださった最善の道であると信頼することが大切だと思います。

見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。　(マタイ 28･20)

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。　(イザヤ 43･4)

「イエス様はこんな私をも愛してくださり、決して見放さず共にいてくださる」という聖書のみことばにも、慰められました。何の役にも立たない欠けた器のような者を、イエス様は喜んでくださることを、心からうれしく思います。

この年はもう一つ、大きな出来事がありました。「親戚中に迷惑の掛けっぱなし」と言われていた叔父の死でした。

その頃、病身の叔父は転院先を探さなければならない状況にあり、叔父も母も思い煩っていました。それを聞いた私が「一番良い場所を与えてください」と祈りました。その翌日、叔父は天に召されました。集会の方々にお見舞いに行っていただき、みんなでお祈りした1週間後のことでした。叔父にとって「一番良い場所」は、イエス様がおられる天国だったのでしょう。その少し前、叔父は主の前に自分の罪を告白し「ごめんなさい」と言っていました。そして、それを待っていたかのように、イエス様はあっという間に叔父を天国に引き上げてくださったのです。

叔父の葬儀は、親族で初めての聖書に基づく式となりました。親族や知人に、聖

書のみことば、永遠のいのちの希望を伝える恵みの時となり、集われた方々も口をそろえて「良い葬儀だった」と喜んでくださいました。そして、数ヵ月後には私の両親が洗礼の証しに導かれたのです。

一連の出来事を通して、本当に**「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。」(伝道者 3・11)**と実感しました。また、どんなに欠けた器でも、主は用いようと思われた時には用いてくださることを教えられた気がしました。

話はずっとさかのぼりますが、小学校高学年の頃読んだ『赤毛のアン』の影響で、聖書は、いつかは読んでみたい、と思っていました。その後、三浦綾子さんや星野富弘さんの本を通してその思いは強まり、20歳前後に読んでみました。でも、一人で読んでも良くわからず、最後まで読むことはできませんでした。

30歳の時、なかなか授からなかった子どもが産まれて半年後、友人の勧めである宗教団体の聖書勉強会に参加しました。前から聖書の話をしてくれていた別の友人に電話をし、そのことを伝えました。するとすぐに、「その宗教団体の教えは、聖書に書いてあることとずい分違う」と注意してくれました。私は、それで大変迷いました。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

(詩篇 139・23、24)

本当に神様がいるのなら、必ず正しい道を教えてくださると思い、真剣に祈りました。やがて、その宗教団体は聖書を使ってはいるけれど、それは表向きだけで、特殊な教団組織が絶対権を持つ問題のある教団であり、神のみことばである聖書をそのまま受け入れる信仰とは大きく違うことを知らされました。理解できてもできなくても、丸ごと聖書のみことばに信頼して感謝することが本当の信仰だと確信できました。イエス様が祈りを聞かれ、永遠の道に導いてくださる、と喜びの涙が溢れました。それまでに聖書で何度か目にしていた「わたしについてきなさい」というイエス様の弟子たちへの呼びかけは、私に語ってくださっていたのだ、とわかり、心の底から喜びに満たされました。それからは、聖書のみことばが、生きて働く大事な宝物となりました。

そして、私は御代田集会に導かれました。この時も、迷いながら真剣に祈った結果、確信をもって移ることができました。5歳になった長女と1歳の長男を連れて毎日曜日、御代田へ出かけました。集う場所が遠くなって、主人を一日、一人にしておくことが気になりました。本当にこれでいいのかと思ったこともあります。けれども「ご主人が許してくださるなら、感謝して喜んでいらっしゃい」と言われ、集い続けました。そして、皆さんの確信に満ちた祈りに支えられ、約1年後、主人はメサイアの賛美を通してイエス様を信じる者へと変えられました。キリスト集会に集う前には考えられなかった、あっという間の出来事です。祈りを聞かれる主に、心から感謝しました。

信仰をもって約15年、振り返ってみると本当にいろいろな方との出会いや、たくさんの出来事がありました。その中には失敗も数多く、たくさんの方を傷つけてきました。ごめんなさいと謝って済む問題ではないこともあります。でも、良いことも悪いことも、すべてイエス様のご支配の下にあります。何もできない私だからこそ、「イエス様、あの方、この方たちのことを、どうぞよろしくお願いします」と祈れることをうれしく思います。そう言いつつ、本当に気まぐれで、祈りの少ない者です。すべての人が救われて真理を知るようになるのを望んでおられるイエス様が、ひとりひとりを愛してくださり、祈ってくださいますから、感謝です。

また、日々の歩みの中、一番身近な家族に対して、愛のない態度をとり、傷つける言葉をすぐ口にする私です。子供たちに対しては、こうなって欲しいという自我と未だに戦う者ですが、イエス様は私以上に子供たちを愛してくださり、それぞれに必要な最善の道を用意してくださっていますから、感謝して祈っています。自分自身に対しても、こうあるべきだという理想や自我と相変わらず格闘しています。ありのままの自分を受け入れるためにも、イエス様のみことばが必要です。これからだんだん病状が悪くなると思われる主人との生活においても、**「彼にふさわしい助け手」(創世記 2・18)**であるためには、イエス様が共にいてくださることが絶対に必要です。ただ「私は駄目だ」と卑下するのではなく、「イエス様にあって私はできる」という信頼をもって、賛美しながら一歩一歩を歩んでいきたい、と心から願っています。

あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

(ユダ 24、25)

1959年長野県生まれ。宇都宮市立細谷小、宇都宮大附属中、新潟中央高、信州大学教育学部卒。家族は、夫 史彦さん、長女 遥子さん、長男 恵介さんの4人家族。

イエス様は祈りに答えてくださいます

江藤 尚広

私が3歳の頃、両親はイエス様を信じて救われました。以来私も両親に連れられてキリスト集会に集うようになりました。最初に集会に行った時のことは全く覚えていません。気がついたら集っていました。毎週日曜学校に通ってイエス様の話をたくさん聞き、すべて信じました。イエス様は神様なのに、人としてこの世に生まれ、多くの奇蹟を行われたこと、私たちの罪のために十字架で死なれ、3日目によみがえられたこと、人はそれを信じれば救われることなど、疑ったことは1回もなく、私にはすべてが当然のことでした。私はイエス様に頼っていたつもりで、信仰的に「良いクリスチャンだ」と思っていました。ところが本当はイエス様に頼っていないことが、大きな試練を通して明らかになりました。

私は小さい時から、勉強に関して父から厳しく教育されてきました。大学受験のために大手予備校に通いましたが、広い教室に生徒を何百人も詰め込むすし詰め授業に疲れてしまいました。予備校から帰宅して夜中まで勉強する毎日が続き、体力がない私はとうとう体を壊してしまいました。神経疲労でした。何とか治そうと色々な病院に行き、薬も飲みましたが全く良くなりません。西洋医学だけではなく、カイロプラクティックやバンキー治療など、周りから勧められるままに色々とやりましたが、良くなるどころか、かえってひどくなってしまいました。まず激しい脱力感に襲われ、全く何をする気力もなくなりました。幻聴が聞こえて、頭の中で音楽がいつも鳴り続けました。音に対して非常に過敏になり、音楽やテレビの音を聴くと頭が痛くなりました。車の大きな音を聞いて頭が破壊されるように痛くなり、車の多い東京から静かな御代田に移らざるを得なくなりました。人の話声を聞くのもつらくて、誰とも話せなくなりました。胃を悪くして普通の食事ができません。胃に負担をかけないようにと食は細くなる一方でした。日光に当たると気持ち悪くなるので、外にも出られなくなりました。文字を読んでも頭が痛くなるので、新聞や雑誌も読めませんでした。結局自分では何一つできない状況に追い詰められました。

長い間そのような状態が続きました。イエス様を頼らず、何とか自分の力で治そうと努力しました。体を壊す前は、自分はイエス様に頼っていると思っていましたが、実際はそうでなかったのです。自分がこのようになるとは思いもよりませんでした。試練や苦しみに会ってはじめて、人間は



2004年5月、西軽井沢国際福音センターで結婚式の時に、それぞれの両親と。中央、尚広さんと絵里さん

本当の姿が分かるのだと思います。ただ、両親は人間には一切頼らず、イエス様にだけ頼ることに徹底していました。母に次のみことばが与えられました。

神は人のたましいが、よみの穴に、はいらないようにし、そのいのちが槍で滅びないようにされる。あるいは、人を床の上で痛みによって責め、その骨の多くをしびれさせる。彼のいのちは食物をいとい、そのたましいはうまい物をいとう。その肉は衰え果てて見えなくなり、見えなかった骨があらわになる。そのたましいはよみの穴に近づき、そのいのちは殺す者たちに近づく。もし彼のそばに、ひとりの御使い、すなわち千人にひとりの代言者がおり、それが人に代わって、その正しさを告げてくれるなら、神は彼をあわれんで仰せられる。「彼を救って、よみの穴に下って行かないようにせよ。わたしは身代金を得た。」彼の肉は幼子のように、まるまる太り、彼は青年のころに返る。彼が神に祈ると、彼は受け入れられる。

(ヨブ記 33・18～26)

実際にこのみことばの通りになりました。私は何もできない状態で、ますます食べられなくなり、どんどんやせ衰えていきました。ただ信じられないことですが、自分の惨めな状態が分かりませんでした。おそらくサタンにめくらにされていたのだと思います。そして、これ以上悪くなったら本当に肉体的に死ぬ、というどん底までいってしまいました。

その時、イエス様の光に照らされて、初めて自分の惨めな状態を認識できました。と同時に自分はなんという愚かなことをしていたのか、と猛烈に後悔しました。自分で考えて体を治そうとしてやったことが、実は滅びの道だったからです。私は自分でやることにギブアップして悔い改めました。もう手遅れで回復できないと思いましたが、心の底から真剣にイエス様に「助けてください」と祈りました。そのような私にもイエス様は答えてくださいました。薬を飲んだり注射をしたわけでもないのに、その時から少しずつ病状が消えて回復に向かいました。たとえどんなに自分が悪くて失敗したとしても、全能なイエス様の前では問題ではないと思います。自分に失望してギブアップし、イエス様に頼れば助け

ていただけることを体験させていただきました。イエス様に感謝します。

どん底の状態にいた私にとって、社会復帰して仕事をしたり、ましてや結婚するなど考えられないことでした。それでも自分に合った仕事を与えてくださるように主に祈りました。当時は御代田の第一ゲストハウスを建設中で、アメリカから大工さんが来てベックさんの別荘に寝泊りしていました。別荘で大工さんの食事の準備、皿洗い、掃除などのお手伝いをすることから私のリハビリが始まりました。お手伝いに来られた他の集会の方々と一緒に数ヵ月間楽しく働くことができ、徐々に回復していきました。その後、集会の方の会社でアルバイトをすることになり、1年半後には正社員として働けるようになりました。10年間勤務した後で、それまでは考えてもみなかったことですが、父の会社で働くことになりました。今の仕事はとても自分に合っていて、イエス様が祈りに答えてくださったことが分かります。

また結婚についても、自分にふさわしい助け手を与えてくださるように長年祈ってきました。集会では絵里ちゃんのことが気になっていましたので、「イエス様のみこころの結婚相手は絵里ちゃんでしょうか？はっきりわかる形で教えてください」と祈りました。それに対してイエス様は、集会の20年来の親友であり、絵里ちゃんの会社の上司でもある古田雅一さんを通して、絵里ちゃんを結婚相手として紹介してくださるという答えをくださいました。ただ、私はそれだけでは満足せず、120％の確信を求めました。お付合いをしてもなかなか確信が与えられませんでしたが、周囲の方々のお祈りにも支えられて、最後に確信が与えられ、結婚へと導かれました。次のみことばが頭に浮かびました。

「わたしに聞け、ヤコブの家と、イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」（イザヤ 46･3～4）

このみことばの通りに、かつての惨めな状態からイエス様に救っていただいて、一生背負って運んでいただけると感じました。

イエス様の備えられた結婚は祝福に満ちていることを、2人で毎日体験させていただいています。毎朝2人で聖書を読み、祈ってから1日を始められることは、結婚前にはなかった大きな恵みです。

結局、これまでの人生で、イエス様は私の祈りにすべて答えてくださいました。病気からの回復、自分に合った仕事、そして結婚という3つの祈りに対して、すべて最高の形で答えてくださいました。イエス様の大きな愛と恵みに心から感謝し賛美します。

1966年東京都生まれ。本宿小、武蔵野三中、巣鴨高校卒。日本大学文理学部中退。(株)アイ･ピー･エル勤務。妻 絵里さん。

主イエス様はすばらしいお方です

江藤 絵里

ある教会の日曜学校に通っていた私は、天地万物をお造りになった神様の存在を信じていました。イエス様の十字架と復活の話も特に疑うことなく信じていましたが、それが何のためだったのか考えることはありませんでした。

教会から足が遠退いていた中学生の時、聖書のみことばによって喜び始めた母の勧めでキリスト集会に行くようになりました。そこに集うと、人の性質によるものとは思えない本物の温かさと不思議な豊かさに包まれるのを感じました。集会では聖書のみことばがたくさん読まれ、生きたことばとして次々と私の心に入ってきました。それまでも聖書に触れてきたはずなのに、全く新しい体験でした。イエス様は今も生きておられ、私を深く愛してくださっている主であることを知り、心の底から静かで確かな喜びに満たされました。そしていつも共にいてくださる主イエス様に何でもありのままを祈れるようになりました。

当初、聖書の中で箴言という箇所が心に引っかかってきました。

人の目にはまっすぐに見える道がある。
その道の終わりは死の道である。
（箴言 14･12）

私は当時、自分をよい子だと思っていました。ところがそれはとんでもない間違いで、それどころか主に心を向けず自分を誇りとしていること自体が死に至るほどの罪であると知らされ、衝撃を受けました。そしてそのような私の罪を贖うために、イエス様が神の御子でありながら人の姿をとって地上に来られ、十字架にかかって死んでくださったことがわかり、これもまた衝撃でした。さらにイエス様は死と悪魔に勝利されてよみがえられ、私たちに永遠のいのちの約束を明らかにしてくださっていたのでした。私の心に悔い改めと感謝が起こされ、救われたという確信を持つようになりました。またイエス様は天国に私たちの住まいを備えてから、再び私たちを迎えに来てくださると知って、その日が待ち遠しいという思いでいっぱいになりました。

父もまもなくイエス様を救い主として受け入れ、家族の中心にイエス様がいてくださることで本当の一致が生まれました。家族揃って洗礼を受ける時、ベックさんが「毎朝、聖書を読んで祈るといいね」とおっしゃったことから、毎朝家族で共に聖書を読んで祈ってこられたのは本当に大きな恵みであり、主の守りでした。

救われてからは、日常生活でもみことばが支えとなり、主イエス様が祈りに必ず答

えてくださることを体験するようになりました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。

(詩篇 37・5)

のみことばどおり、主の前にへりくだって祈ると平安になり、そればかりか何でもおできになる主ご自身が、私の考えよりもはるかに優れた方法で最善の結果に導いてくださいます。主にゆだねるのは決して現実逃避などではなく、すべてをご支配なさる主こそが現実的かつ具体的に働いてくださることを知りました。一方、救われるとき自分の罪の性質に気づかされましたが、それでおしまいではなく、自分がいかに傲慢で自分のことしか考えられない者であり、自分のうちに良いものが何一つないことを少しずつ見せられていきました。その度に十字架への感謝が増え、主の愛の大きさにひれ伏すばかりでした。

こうして私はすばらしい主イエス様のことを考えるだけでうれしくなり、主に喜ばれる歩みをしたいと願うようになりました。しかし、私は本当にみじめな人間です。そのうちに私とイエス様の関係は「大丈夫だ」という高ぶった気持ちが強くなってしまいました。そのような私は完全に砕かれなければなりませんでした。当時の慌しい生活の中で、私は次第にイエス様の前に静まることがなくなり、祈りさえも自分勝手で感謝のない一方的なものとなっていきました。イエス様のすばらしさを疑うことはありませんでしたが、イエス様を愛せず全く喜びがなくなりました。集会へも集っていたのですが、私の心はイエス様から離れてしまったのでした。ただ主に対する恐れだけ残っていました。そして私は苦しみました。主のところに帰らなければ、と頭ではわかっていても、帰れそうにない、いや、帰ろうとしていない自分に気づき、私は初めて自分が怖くなりました。主から離れて自分勝手にどんなところにでも行きかねない自分の本質を見たからです。自分のうちに良いものが何一つないどころか、全く絶望的な存在であることを知らされました。いよいよ心が疲れ果てた私はやっと主に助けを求め、心の中に光を迎えて主のところに帰ることができました。

この経験は、私がイエス様の十字架によってどこから贖い出されたのか、その穴をはっきり見せられた、私にとって必要なものでした。そして自分に絶望したことは本当に恵みでした。このような私に対する主の絶大な愛を考えるとき、感謝と賛美が心に一層満ちあふれるようになりました。また自分が絶望的な存在であることを思い出すとき、不思議なことにとても晴れやかな気持ちになるのです。おそらく主の足元に小さくならざるをえず、高ぶる心や自分の思い、すなわち自分自身から全く解放され、イエス様だけが私を満たしてくださるからなのだと思います。

それからのち主は私にご自身をさらに豊かに現わしてくださいました。仕事を離れて集会の方々と共に多くの時間を過ごす恵みが与えられ、イエス様のいのちの泉に浸っているかのように心が芯から満たされました。主のなさることを共に見たり、語り合い祈りあったりすることで喜びが倍増し、主の群れの中に身を置くことによっていただける祝福を存分に味わうことができました。学びを通して聖書のみことばが以前にも増して輝いて見え、計り知れないみことばの力と主の偉大さに改めて圧倒されました。主はまた、共に働く方々と毎朝共に祈れる職場に導いてくださいました。たとえ困難があっても皆が主からのものと受け取って励ましあい、具体的に祈りあって立ち向かうことができました。また、主は私たちに妥協することなく主に信頼しきることを求めておられると強く感じるようになりました。そうすれば、**「火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」(イザヤ 43・2)**のとおり、完全に守られることも見せていただきました。



結婚式でケーキカットする尚広さんと絵里さん

そのような中で一昨年、同じ集会に集う尚広さんを結婚相手として紹介されました。共に祈って歩める方との結婚を長い間祈っていましたが、私も家族も特に真剣に祈るようになってまもなくのことだったので、このことは主から来た、と思わされました。導きを祈ると、集会で、**「はい。まいります。」(創世記 24・58)**と主の招きに素直に従えば祝福されるというメッセージが語られたので、安心して踏み出しました。その時から私の心は大きな平安に包まれ、二人で会うようになってからも平安は増すばかりでした。さらに次のみことばによってこの結婚が主のご計画であるという確信をいただきました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。—主の御告げ。—それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

(エレミヤ 29・11)

昨年の結婚に至るまで、ただ主に運ばれているように感じられました。私のことを私以上によくご存知であられる主がすべて最善を成し遂げてくださると確信でき、主に身を任せられるというすばらしい特権を本当に感謝しました。共に祈って歩める結婚生活を通しても、お互いがお互いにちょうどよい伴侶であると実感し、驚きながら感謝の日々を送っています。主が下さる豊かな恵みに対し、主への感謝はとても言葉に尽くすことができません。本当に、主イエス様はすばらしいお方です!

1971年東京都生まれ。桃四小、立教女学院中・高、上智大学理工学部卒業。夫 尚広さん。

主のあわれみは尽きません

兵藤 勝義



秦野家庭集会にて。左から、勝義さん、妻 幸江さん。右側、ベックさん

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。　（伝道者 12・1）

創造者であるイエス様に私が出会ったのは30歳を過ぎてからで、それまでは、漠然としたものを目標に過ごしてきました。

社会に出て働き始めた頃からか、ふつふつと「このままでいいのだろうか？」という不安と焦燥感にかられるようになりました。その頃から宗教書に目を通す日々が続きました。しかし、深まる知識と反比例するかのように、平安は得られず、生きることの倦怠感のみが増幅していきました。

そのような時に、勤務先の会社の採用面接に参加した女性がもたらした一冊の本に目が留まりました。『光よあれ』という本でした。この本は吉祥寺キリスト集会の方々が、いかにしてイエス様と出会い、救われ、それによって人生がどう変ったかを証ししている書物ですが、表紙を飾る筆者の方々の笑顔の写真と、文章の行間から伝わる喜びが、妙に印象的であったことを今も覚えています。

その後、その女性に誘われるまま家庭集会に集いました。驚いたことに、ここでも皆さんの輝いた笑顔を見ることができ、神様への賛美を初めて体験しました。

「なんと不思議な人たちなのだろう。」「多くの人たちにこの笑顔をもたらす神様とは一体どのようなものなのだろう。」この時の印象は今でも忘れません。

次第に、もう少しこの神様のことを知るにはどうしたらよいのだろうか、という思いが起こされてきました。しかし、聖書を読んでも良くわかりません。それならいっそのこと、日曜礼拝、福音集会に参加してみたら、なにかわかるだろうと思い、初めて吉祥寺のキリスト集会を訪れました。初めての礼拝はわけのわからぬまま過ぎましたが、福音集会で語られた次のひとことに感銘したことを、今でも鮮明に記憶しています。

「私たちの心には私たちの創造主なる神様の形をした空洞があります。その空洞を埋めるのは、創造主なる神様以外にはありません。」――この言葉を聞いたとき、自分の心に存在するいい知れぬ空虚感を満たしてくださるのはこの創造主なる神様なんだ、と確信しました。

この後も吉祥寺のキリスト集会に集いました。しかし、創造主なる神様は必要であることはわかっても、その神様を自分のものとするにはどうしたらよいのか、いわんや救い主なるイエス・キリストとなると私の思考を超えるものでした。そのような時に次のみことばに出会いました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。　（エペソ 2・8、9）

「そうだ、創造主なる神様は今、私のことを捕えてくださったのだ。私の行為の結果ではないのだ。ただこの神様を信じて歩んでいけばいいのだ」と気づかされました。喜びに満ちた瞬間でした。

しかし、このようにして一人歩きを始めた信仰も、おぼつかないものでした。それは次のみことばの中の、叫び出したときのペテロの信仰そのものでした。

「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」イエスは「来なさい。」と言われた。…ところが、（ペテロは）風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。　（マタイ 14・28～30）

このような信仰の状態にあった私を、イエス様はあわれんでくださいました。助け手として、集会の女性を用意していてくださったのです。それは『光よあれ』をもたらした人でした。

私たちは吉祥寺のキリスト集会で結婚し、1年後には娘、香菜美（かなみ）も与えられました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。　（伝道者 3･11）

こうして私たちは、家族の真ん中にイエス様を置いた信仰生活を始めたのですが、仕事の忙しさと長時間通勤のために、いつしか日曜礼拝に集うだけというような状態になってしまいました。日々の祈りもなおざりになり、ただ忙しく時間が過ぎてゆきました。しかし、この時もイエス様はあわれんでくださいました。私は突然、英国赴任を命じられ、家族で渡英することになったのです。赴任当初はみこころがどこにあるのかわからず、不安もありましたが、ロンドンの地にも共に礼拝する集会の方々が備えられました。私たち家族に、新たな信仰生活がイエス様から与えられたのでした。

3年間の海外生活では、静まって神様に祈り、聖霊の働きを通して主の御声を聞くことの大切さを、さまざまな体験を通して教えられました。

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。　（エペソ 6･18）

絶えず祈りなさい。　（1テサロニケ 5･17）

イエス様に出会い、信じる者となって今年で17年になりますが、イエス様はいつも私の信仰の状態をごらんになって、「すべて時にかなって美しい」ことをしてくださっています。

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。　（詩篇 23･6）

主の恵みを感謝します。

1954年栃木県佐野市生まれ。佐野高、千葉大学卒業。株式会社ショウエー勤務。妻　幸江さん、娘　香菜美さん。

神のなさることは 時にかなって美しい

兵藤 幸江

私が初めてキリスト集会に導かれたのは昭和54年、18歳のときでした。当時、集会に集っていた従姉に誘われたのです。一回だけという気持ちで日曜日の礼拝に参加しましたが、以来ずうっと集っています。なぜそうなったか、いくら考えても良くわかりません。ただ「イエス様が生きておられるなら、そのことをわからせください。もし生きておられるなら、ついて行きたいです」と祈ったことだけは、はっきり覚えています。信仰生活を振り返る時、イエス様は今もこの祈りに応え続けてくださっていると思います。

しばらくして弟が信仰に導かれました。それは本当にうれしい出来事でした。今はすっかり集会から離れてしまっている弟ですが、集会に集っていた中学二年から大学卒業までの時期、私たちは毎晩、「両親がイエス様を信じますように」と祈っていました。その頃のことで懐かしい思い出があります。それは弟と私がそれぞれの部屋のタンスの引き出しに、イエス様の再臨について語られたメッセージの録音テープと、信仰の証しを書いた手紙を入れていたことです。最近の自分は、あの時のように真剣に「主よ、早く来てください」と待ち望んでいるだろうか?と考えると恥ずかしい気がします。あの時、祈った「両親の救い」を、イエス様は聞いてくださいました。母は数年後、イエス様を信じるようになり、互いに祈りあえる仲になりました。

集会から離れている弟については、私は長い間、彼自身の問題だと思っていました。しかし最近聖書を通して、イエス様は、たとえ弟の信仰がどういうものであろうと、私の祈りに答えてくださる。答えたいと思っておられると、私自身の祈りの足りなさを示してくださっています。

学生生活を終えて社会に出ることになった私は、毎朝、次のみことばを読み、祈って出勤しました。

奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方ではなく、主を恐れかしこみつつ、真心から従いなさい。何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。　(コロサイ 3･22、23)

けれども実際の自分は、このみことばから遠く離れていました。周りの人が私を理解し、受け入れ、大事にしてほしい、という自我が真ん中に座っていました。このため帰りには「こんなはずではなかった」という挫折感で一杯になるのでした。結局2年後には、からだを壊して仕事を辞めざるを得ませんでした。その頃、結婚について真剣に祈るようになっていました。祈りの中でイエス様が結婚を導いてくださるだろうと、確信に近い思いも与えられていましたので、平安でした。ところがそんな折、就職試験を受ける機会が与えられました。「おや?」と思いましたが、主から与えられた「証しのチャンス」だと思い込んだ私は、就職する気もなく、『光よあれ』という本を持って面接に出かけました。そして、もう二度と会うことはないだろうと思いつつ、面接官に自分の信仰を打ち明け、その本を手渡して帰ってきました。ですから2日後に採用の連絡をいただいた時には本当に驚きました。たった一人の採用でした。実はこの会社で、現在夫である兵藤勝義さんと出会いました。

その頃の彼に対する印象は、何に対しても誠実で、「私よりクリスチャンみたいな人だな」という感じでした。「こんな人と結婚したら幸せになるだろう」と思っていました。けれども結婚相手としては全く考えられませんでした。私にとっての結婚は、大好きなベックさんご夫妻のようなクリスチャン・ホームを持つことだったからです。信仰を持っていない彼との結婚は考えられないことでした。ですから、彼から気持ちを告白された時は、困ったなと思いました。すぐにベックさんのところに相談にうかがいました。以前同じように、結婚を前提に付き合いたいと言って下さる方があり、その時はその人が好きでしたから、「みこころの人がこの人だったら」と祈った時期がありました。でもベックさんは「もう二度と会えません、と手紙を書きなさい」とおっしゃいました。ですから今回もそう言われたらそうするつもりでした。ところが「クリスチャンとでなければ結婚できません、と言ってはだめだよ。クリスチャンは心が狭いと思われるでしょ。集会に誘いなさい」とおっしゃいました。その通りにいたしました。それからは毎週日曜日に礼拝、福音集会に出てくださるようになり、一年半後に結婚に導かれました。

翌年、娘「香菜美」が与えられました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。　(伝道者 3･11)

出産前、8ヶ月の検診で、早産の危険があると言われました。驚いた私は「どうか予定日までお腹の中においてください」



弟さんのご家族と。後列中央、兵藤夫妻と香菜美さん

と祈りました。そして、初めのうちはどんなに祈っても平安がありませんでしたが、その後「最善の時を神様は選んでくださる」と示され、「みこころの時に出産させてください」と祈ることができました。そして16年前の10月2日、予定日の2日後に出産しました。その日の夕方ベックさんがお見舞いに来てくださいました。実は、同じ集会に集っている元ニュースキャスターの山川千秋さんがガンの末期で入院していました。山川さんを見舞われた方々が帰りに訪ねてくださり、たくさんの恵みを分けていただきました。出産のための1週間の入院生活は、山川さんの地上での最後の1週間とぴったり重なり、私たちが退院した日に、山川さんは天に召されました。神様のこの美しいみわざを決して忘れないように、娘の名前を「かなみ」(時にかなって美しい)とつけました。

家族の中で最後まで頑張っていた父が、イエス様を受け入れたのは、大動脈瘤破裂という大きな病気を与えられた後でした。私が受洗したいと申した時には「神を拝むくらいなら、わしを拝め」と言い放った父でしたが、主は、父に「ベックさんに会いたい。このまま死んだら、どこへ行ったらいいか分からないから」と告白させてくださいました。そして父は、自分の口で主の栄光を賛美する者に変えられたのです。

集会に集い始めた時、私はイエス様のことがよくわかりませんでした。ただ、生きておられるイエス様に出会いたい、と思っていました。そんな私の祈りにイエス様は応え続けてくださっています。「わたしはここだ、ここにいるよ」という御声を頼りに、これからもイエス様の後について行きたい、と祈っています。

1960年東京都出身。実践女子中・高卒、同大中退、ジャーナリスト専門学校卒業。夫 勝義さん、娘 香菜美さん。



聖書は何と言っていますか？

罪とはどのようなものでしょうか

ゴットホルド・ベック

天地は自然にできたものではなく、またいわゆる神々の手によってできたものでもありません。この天地は、明確な意思と愛を持ってお造りになった方の作品です。だからこそ天地は美しくまた秩序だっているのではないでしょうか。

この世界には神と称されるものはたくさんあります。しかし、本当の神は、天地をお造りになった方以外にはあり得ないことは論理的にも明らかです。聖書の神はこの方を指します。人間が考え出した神々と区別して、とくに「主なる神」と呼んでいる場合もあります。この方は万物の創造者であり天地の支配者です。

聖書の冒頭に置かれている創世記によれば、主なる神は初めに天と地と、続いてそこに満ちる一切のものを創造されました。この時、主なる神はお造りになったすべてのものをご覧になり、祝福をお与えになりました。世界と地に満ちるものはすべて神のものであり、神をほめたたえるべき存在として創造されました。

人間もそのようにして造られたものの一つです。主なる神は格別の思いをこめて人間をお造りくださいました。ご自身の姿に似せて、神様の呼びかけにこたえることのできるものとして、お造りくださったのです。この時、人間は二つの意味で生きるものとされました。一つは肉体的に生きるものであり、もう一つは霊的に生きるものでした。だからこそ、神様がお造りになった地とそこにあるものを、神様のみこころに従って治めることが委ねられました。

しかし、この最初の人間は悪魔のささやきに耳を傾け、欲望に負けて、主なる神のことばとみこころに背きました。こうして、主なる神の呼びかけにこたえるべき者は、神から身を隠す者となりました。つまり、人はこの時に霊において死んだのです。それ以来、人は神さまのみこころを無視し、自分中心に生きるようになりました。万物の創造者であるまことの神を捨て、造られたもの、滅び行くものを神として祭りあげ、その前にひれ伏す者となりました。旧約聖書のイザヤ書に、**「彼らは、自分の手で造った物、指で造った物を拝んでいる。こうして人はかがめられ、人間は低くされた。(2･8､9)」**とあります。神に似せて造られた者が、その本来の状態から滑り落ちてしまったのです。主なる神の格別の思いと愛のうちに造られながら、神様に背いて霊的に死んだ者となった人間を、主なる神はどのようにしたいとお考えなのでしょうか。驚くべきことに、聖書を通して明らかにされる答えは、新しい霊を与え、永遠の滅びから救いだそう、ということです。次の言葉がそのことを端的に示しています。

「わたし(イエス様)の父(主なる神)のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」 (ヨハネ 6･40)

霊的に死んでしまった人間を救うために、主なる神のひとり子なるイエス様はこの世に来てくださいました。イエス様の最初の呼びかけの言葉は、「悔い改めて福音を信じなさい」でした。悔い改めるとは、自分の罪を認め、主なる神のことばに従って生きることを決意することです。しかし、悔い改めるには自分の罪が分からねばなりません。でも、霊の死んだ人間には、自分も自分の罪も正しく知ることはできなくなっています。自分が考える自分の姿と、他人の目から見た自分の姿が一致しないことはだれでも経験的に知っているのではないでしょうか。まして、全能なる方であり、造り主であられる主なる神の目にうつる姿は、自分が考えるものとは似ても似つかぬものだと言ってもいいのではないでしょうか。悔い改めるためには聖書をとおして罪を知り、神さまがご覧になる自分を知らなければなりません。

1. 主なる神の前には、人は罪びとである

神さまの目には、私たちは例外なく罪びとです。聖書は次のように語っています。

この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもいないから。
(伝道者 7･20)

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず…
(ローマ 3･23)

人間の姿は、私たちがどう思うかとは関係なく、神様の目には例外なく罪びとです。では例外なく罪びとだとはどういうことなのでしょうか。それは、最初に造られた人アダムが罪を犯して以来、全人類は罪の中に生きていることなのです。次のことばがそのことを意味しています。

一つの違反によってすべての人が罪に定められた…… (ローマ 5･18)

一つの違反とは旧約聖書の創世記に出てくるアダムの罪を意味します。この言葉に初めてふれた人は、とまどいを感じるかも知れません。想像することさえできない昔の人であり、自分とはまったく関係がないとしか思えないアダムの罪のゆえに、すべての人には罪があると述べられているからです。だから、私はアダムの罪に関してまったく関知しておらず、当然のこととして私には責任はない、と考えるかもしれません。しかし、問題は人がどう考えるかではなく、主なる神がどのようにお考えになっているかなのです。以下のことばは陶器師とその陶器師が造った陶器の関係にたとえて、そのことを語っています。

ああ。陶器が陶器を作る者に抗議するように自分を造った者に抗議する者。粘土は、形造る者に、「何を作るのか。」とか、「あなたの作った物には、手がついていない。」などと言うであろうか。
(イザヤ 45･9)

2. 罪と不法の状態とはどのようなものか

人は例外なくすべて罪びとであると聖書は語っています。ではその罪と、不法の状態とはどのようなものでしょうか。そのことを

はっきりと知らなければ、「そんなばかなことはない。私は罪を犯したことがない」と主張する人がいてもおかしくありません。そして、人間の間の約束ごとである法律と主なる神から与えられている神の戒めを混同し、的外れの議論に陥ってしまいます。

そこで、イエスは彼に言われた。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」これがたいせつな第一の戒めです。

（マタイ 22・37、38）

罪を犯している者はみな、不法を行なっているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。　（1ヨハネ 3・4）

ここにあるように、主なる神が私たちに望んでおられることは、造られた者である私たちが創造主である主なる神を愛することです。言い換えるなら、目的を持って私たちをお造り下さった方の目的にかなう者となる、つまり自分自身を完全に主なる神に捧げることです。ですから、この戒めあるいはおきてを守っていない者は、それを知っているが否かにかかわらずそれだけで罪びとであり不法な者なのです。主なる神のひとり子であられるイエス様は、このおきてを守っていない人々に向かって次のように仰せになりました。

あなたがたのうちには、神の愛がありません。　（ヨハネ 5・42）

すべてこの世のもの、世にあるものを第一に愛することは、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」という主なる神のみこころとは相容れないものです。だから、この世を愛し、主なる神とそのみことばに無関心で冷淡な人は、例外なく滅び去ります。

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父（主なる神）を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。　（1ヨハネ 2・15～17）

「その日には、大ぜいの者がわたし（イエス様）に言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」

（マタイ 7・22、23）

罪とは完全な道徳的堕落の状態です。それに対して、人間的な尺度で考える道徳的行為、言い換えるなら人間が考える意味での「よい行ない」は、主なる神の法にかなったものではなく、主なる神の目には何の価値もありません。神様の目に映る人とは、次のみことばのとおりの状態に陥っているのです。

すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。　（ローマ 3・12）

私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。　（イザヤ 64・6）

主なる神のことばである聖書への無関心、無理解は、主なる神への無関心、無理解と同じであり、その人の完全な道徳的堕落を意味しています。

彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしない……

（マタイ 13・13）

彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。　（エペソ 4・18）

ですから、完全な道徳的堕落としての罪の状態にある人すなわち生まれながらの人間は、主なる神の賜物を受け入れることができません。また、主なる神のおきてに従うことは完全に不可能です。

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。　（1コリント 2・14）

主なる神の前に問題とされるものはいつも人の心です。アダムが罪を犯して以来、人間の心は陰険なものとなりました。教育や努力、社会制度の改革によっても、それは直るものではありません。主なる神はこの事実をはっきりと指摘なさいました。

人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。　（創世記 8・21）

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。

（エレミヤ 17・9）

口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。　（マタイ 15・18、19）

よこしまな滅びの心からは、悪いことと一緒に良いものが出ることはあり得ません。そのことは、泉にたとえて語られています。

泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。　（ヤコブ 3・11）

生まれ変わっていない人は霊的に死んでおり、その思いは、「肉の思い」であると言われ





罪とはどのようなものでしょうか

ています。それは罪によって曇らされたものです。そのために、どうしても神のみこころに従うことができません。

肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。(ローマ 8·7)

良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。 (マタイ 7·18)

3. 罪の結果はどのようなものか

罪の結果は死であり、非常に恐ろしいものです。生まれ変わっていない人は、将来、肉体の死が訪れるだけではなく、今すでに、霊的に死んでいるのです。

罪から来る報酬は死です。
(ローマ 6·23)

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、 (エペソ 2·1)

また、さらにもう一つ、神様によって定められた時が来ればもたらされる、第二の死と呼ばれる永遠の死があります。これこそ完全な滅亡です。その時になっては、そこから逃れる道は完全に閉ざされます。

それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。
(黙示 20·14、15)

4. 不信仰の恐ろしさ

多くの人は、「罪とは、法律に反する何かをすることだ」と考えているのではないでしょうか。しかし、主なる神の意思である聖書のことばへの無関心、無理解は、主なる神への不信仰そのものであり、それ自体が罪です。ですから、主なる神がそなえてくださった救いを受け入れることを拒み、不信仰にとどまることもそのままで罪であり、さばきのもとにあります。主なる神のひとり子であるイエス様を信じたくない者は、結果的に自分の罪の中に死なねばなりません。

御子(イエス様)を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。 (ヨハネ 3·18、19)

「その方(聖霊)が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたし(イエス様)を信じないからです。」 (ヨハネ 16·8、9)

それでわたし(イエス様)は、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」
(ヨハネ 8·24)

不信仰な者は、聖書を受け入れることを自分の意思で拒んでいる、と考えています。しかし、実際は悪魔がそうさせているのです。悪魔は、生まれ変わっていない者、不信仰な者の中に働き支配しています。不信仰な者は、この世の神である悪魔の虜として、悪魔の命じるままに動かされています。このことは、動かされている人間には分からないのですが、全能なる方の目には明らかです。

私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々のばあいに、おおいが掛かっているのです。そのばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。 (2コリント 4·3、4)

主なる神によって提供されている救いを受け入れて救われた者も、救われる前はこの世の神である悪魔の虜として、悪魔の命じるままに動かされていました。

そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。
(エペソ 2·2)

主なる神は、救いを得るようにと聖書をとおしてお語りくださいます。イエス様は私たちの身代わりとなって十字架にかかってくださいました。十字架上で流されたイエス様の血によって私たちの罪が赦されたのです。またイエス様の復活によって罪と死の力に勝利してくださいました。ですから、イエス様を信じる者は罪が赦されていることと、悪魔の支配から解放され自由にされていることとを経験的に知ることができます。イエス様の救いを受け入れた者はイエス様のものとされ、聖なる者とされるのです。

「それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたし(イエス様)を信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。」 (使徒 26·18)

聖書がはっきりと記していることは、救い主なるイエス様は終わりの日にはさばき主となられることです。この時、聖書を退け、悔い改めを拒んできた人々はさばきの下におかれます。悪魔の支配の下で不信仰のままにいる者は、最後には悪魔と一緒に滅びに陥らなければなりません。

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。 (黙示 20·10)

おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。
(黙示 21·8)

そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。(2テサロニケ 1·7〜9)

また私(使徒ヨハネ)は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。 (黙示 20·11〜15)

次のみことばは、これらのことを一言で語っているのではないでしょうか。

生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。 (ヘブル 10·31)

誤解しないでいただきたいことは、イエス様のさばきを受ける者は、最初から恵みの対象から除外されていた、のではないということです。イエス様はすべての人のために救いを成し遂げ、すべての人が救われることを望んでおられます。例外なく、すべての者に救いの機会を提供してくださっています。

神が御子(イエス様)を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。
(ヨハネ 3·17)

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。
(1テモテ 2·4)

主は、･･･ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。 (2ペテロ 3·9)

今は恵みの時、救いの日です。この恵みの時には、主なる神の愛といつくしみが、罪びとを悔い改めに導くために与えられています。しかし、やがて必ず訪れる審判の日には、主なる神の愛はかたくなな者への怒りに変わります。

神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒

りを自分のために積み上げているのです。
(ローマ 2･4､5)

提供されている罪の赦しを受け入れることを意識して拒み、不信仰のままにいることを選び取ればおしまいです。その人たちは自分の意思で滅びへの道を選んだのですから、滅びに向かっていくのも自分の責任なのです。

あなた(主なる神)が彼らを打たれたのに、彼らは痛みもしませんでした。･･･彼らは懲らしめを受けようともしませんでした。彼らは顔を岩よりも堅くし、悔い改めようともしませんでした。
(エレミヤ 5･3)

彼らは、主のなさることもその御手のわざをも悟らないので、主は、彼らを打ちこわし、建て直さない。 (詩篇 28･5)

5. 主なる神の愛

主なる神の愛は、高さも深さも、どのよう尺度においても人間の愛と比べることはできません。主なる神は、人間が堕落した状態にあるにもかかわらず、人間を愛してくださっています。

主なる神はご自身の意思を聖書のことばとして明らかにし、私たちに与えてくださっています。イエス様の救いについても、それがご自身の意思に基づくものであることを旧約聖書の中で繰り返しお語りくださっています。たとえば、旧約聖書イザヤ書はイエス様が来てくださるよりも数百年も前に書かれたものですが、イエス様が来てくださり、私たちの身代わりとして死んでくださり、そのことによって私たちの罪のゆるしを成し遂げてくださることを預言しています。

彼(イエス様)は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。 (イザヤ 53･5)

時が来て、主なる神は、ひとり子であるイエス様をこの世に遣わし、十字架の上で罪のあがないをなしとげてくださいました。ここに、神の愛が明らかにされました。

神はそのひとり子(イエス様)を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。
(1ヨハネ 4･9､10)

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。
(ローマ 5･8)

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
(ヨハネ 3･16)

6. 救いの恵みとはなにか

救いの恵みは、まず罪の赦しとして与えられます。救いの恵みは、それを受ける資格のない者、受けるに値しない罪びとに対して、主なる神から一方的に与えられるものです。いうまでもなく救いの恵みを与えることは主なる神の義務ではありません。人は、どのような意味においても恵みを求める権利を持たないのですから、恵みなくしてはただ刑罰あるのみです。

ただ、神の恵みにより、キリスト･イエスによる 贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。 (ローマ 3･24)

もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるのではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。
(ローマ 11･6)

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。
(エペソ 2･8､9)

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による購い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。 (エペソ 1･7)

イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。
(ヘブル 2･9､10)

主なる神の恵みは途方もなく大きいものです。人の罪の大きさ、深さには関係がありません。ですから、罪がいくら大きく、また深くても、悔い改めの心をもってイエス様に求めるなら、恵みはただで与えられます。

たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。
(イザヤ 1･18)

罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。 (ローマ 5･20)

神は、罪を知らない方(イエス様)を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。 (2コリント 5･21)

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる購いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

（ローマ人 3・24〜26）

罪の結果は非常に恐ろしいものですが、イエス様を信じて救われた者は永遠のいのちの約束を信じることができます。永遠のいのちは、生きる喜びとともに、「死ぬこともまた益です」と肉体の死をも喜びをもって迎えることのできる、希望のみなもとです。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

（ヨハネ11・25）

あるドイツの歌の歌詞に、「この世は失われてしまった、しかし、キリストがお生まれになった、だから喜べ、大いに喜べ」というものがあります。ここには二つの事実と一つの命令が明らかにされています。事実とはすなわち、この世が失われてしまっていること、またキリストがお生まれになった、というものです。前の事実はこの世は愛のない世界になったことを意味し、後の事実は私たちを感動させます。主の命令は、「喜びなさい、大いに喜びなさい」というものです。代わりに死んでくださるという、大いなる代価を払って救いが成就されたゆえに、主のものとなることが許されています。

主イエス様の血は罪を清めます。このことを信じるすべての罪びとを赦し、義とするところに、主なる神の恵みの本質があります。恵みとは、「あなたは罪を犯したことのない人として、わたしの前に立つことが許されている」という、主なる神からの宣言ともいえます。罪ののろいを受けるはずの者も、滅びから解放されるばかりか、主なる神ご自身の義を受けるのです。悔い改めて救いの恵みをいただこうではありませんか。



メッセージ当番表

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。(エペソ 6:18)

	6月				7月						8月				
	5日	12日	19日	26日	3日	10日	17日	24日	31日	7日	14日	21日	28日
北海道	藤原N	岩崎	加藤S	岩下	重田H	川股	杉本	芳竹	羽石	山徳	中山Y	武井	白石K
青森		大場		中山Ch		藤田E		笠井			佐山	福島	
仙台／盛岡	立之	蘇畑	川股	重田H	増森	松見	松田	福島	蘇畑	深沢	高田	奥	藤田E
新潟	松下	笠井		高田H	山下	芳竹	黒沢	江藤	富田			鈴木T	
宇都宮	吉田	野田	見目	御任	藤井	谷口	羽石	鈴木H	谷口	吉田	見目	川股	金井
日立	上田	松田	青柳	藤田E	羽石	柿沼Y	平山	和田S	南村	田中J	槙野	山徳	吉田
土浦	和田S	古谷T	蘇畑	青柳	小野沢	青木	古谷T	大場	松見	杉本	南村	浅野	和田S
川越	江田	芳竹	上野	内藤	代田	飯島H	川股	古田K	白石Y	野田S	野口T	御任	大庭
春日部	宮田	西村	辻	中込	川股	藤井	鈴木H	小々馬	辻田H	御任	吉田	大庭	会沢
印旛／鹿島	滝	末村	会沢	小川	伊牟田	会沢	笠井	松尾	染野	宮田	大野	山口I	槙野
市川	飽戸	田尾	鈴木T	小島	柿沼Y	滝	岩崎	小川	大場	蘇畑	伊牟田	会沢	大沢A
東京 10:30	清水Y	古田K	染野	ベック	白石K	重田S	野田S	飽戸	青柳	辻田H	中込	酒井Ch	平山
東京 14:00	石塚	岩本	野口H	江藤	小島	水渡	富岡	松見	久田	高村	岡本M	古田稔	蘇畑
東京 19:00	柿沼Y	旭	田中J	佐山	黒沢	辻	浅野	古屋	中山Ch	松田	中村K	野口O	小々馬
横浜	中山Ch	菊池	寺田	黒田	兵藤	酒井M	和田Y	大須賀	立之	河辺	牧野	山田K	古川
相模原	大高	内藤	山田K	立之	江藤	神沢	飽戸	石井A	後藤T	黒田	菊池	旭	酒井M
御代田	平井	山田M	野口O	江田	松下	羽石	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	片桐
伊那	熊谷	重田S	織田	松下	末永	山田M	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	キャンプ	熊谷
富山	江藤	織田	山下	大下	吉田	富田	野口O	柿沼Y	仲井間	大下		松本Y	平
高山	大下		吉田		大下			新井				新井	
伊豆	青柳		菊池		加藤S		菊池			加藤S		菊池	
藤枝		芝田		小林		内藤		野田S		岩下			石塚
掛川	酒井M		岩上		染野		秋本		金子		大塚		
名古屋／豊橋	辻田H	田中J	酒井M	滝	山科	津田	今村	和田Y	新井	会沢	松本S	那須	田中J
石川／福井		植原		重田S		平		長岡					植原 (27)
近江八幡	高村	吉田	高村	高村		古田K	高村	高村	高村	後藤(地元)	高村	青柳	高村
大阪	寺田	水渡	中山K	池島	長岡	那須	大場	小久保	浅野	高橋Y	広田	内田	山科
芦屋	野口O	高村	池島	森島	渡辺S	新井	久田	吉田	瀬川	滝	小久保	清水Y	広田
西神	瀬川	内田	森島	久田	岩崎	小山	岡本M	渡辺S	池島	広田	中山K	飽戸	滝
島根		瀬島	黒田R		古川	キャンプ			古川		福代		岩崎
山口/広島/徳山	秋本	杉本	岡本M	田中J	笠井	キャンプ	山口H	藤原T	芳我	児玉	渡部	瀬島	香川
岡山	鈴木T	武井	後藤T	平山	広橋	久田	近森	小島	内田H	藤原T	渡辺S	内藤	福島
徳島	中山K	江藤		北原	山本	野間	蘇畑	河野	菊池	笠井	伊野	広橋	池田

当番表の石川／福井の項目で、担当者名の横に記入した数字は福音集会の開催日です(日曜に会場を確保できず、前日の土曜に開くもので

変更があり次第、集会のホームページhttp://www.christ-shukai.net/の日曜福音集会メッセージ当番表は変更箇所を更新されます。
最新データはホームページをご覧ください。

メッセージ当番表

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。
そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。
（エペソ 6:18）

	6月				7月					8月			
	5日	12日	19日	26日	3日	10日	17日	24日	31日	7日	14日	21日	28日
坂出	染野	青柳	小野沢	古田K	野間	森島	会沢	小野沢	広橋	武井	内田H	池田	伊野
高知	古田K	伊野	高嶋	近森	大須賀	江藤	飯守	水渡	岡本H	池田J	窪内	伊野	池田D
松山／西条	白石K	平山	金子M	内田H	野田F	藤原N	野間	森島	近森	江藤	光藤	北原	内藤
福岡／別府	中野	庄野	和田Y	浅野	小山田	別所	清水Y	浅野	滝	古田K	山口H	松井	野田S
長崎／佐世保	岩本	染野	芳竹	辻田M	別所	辻田H	中込	岩崎	庄野	加藤M	別所	石井A	山口H
宮崎／小林	武井	河辺	上田	羽石	山口H	上野	田中J	菊池	平山	菅原	高橋I	藤原N	染野
鹿児島／熊本	古田M	上野	桜本	岩崎	庄野	蘇畑	江藤	須藤	重枝	石塚	加藤M	古田K	和田Y
沖縄／宮古	蘇畑	飽戸	平山	代田	飯守	仲井間	松見	平良K	古田K	平良M	喜屋武	芳竹	青柳
米国／カナダ＊	藤井	柿沼Y	岩崎	藤田	青柳	古田稔	酒井M	羽石	棚村	藤田E	和田Y	吉田	藤井
バンコク	石井A		江藤									平山	

	9月			
	4日	11日	18日	25日
北海道	藤原N	岩崎	加藤S	岩下
青森	大場	キャンプ		中山Ch
仙台／盛岡	立之	キャンプ	川股	高田H
新潟	松下	笠井	長岡	重田H
宇都宮	吉田	野田S	見目	御任
日立	上田	松田	青柳	藤田E
土浦	平山	古谷T	蘇畑	青柳
川越	江田	芳竹	上野	内藤
春日部	宮田	西村	辻	中込
印旛／鹿島	滝	末村	会沢	小川
市川	飽戸	田尾	鈴木T	小島
東京 10:30	清水Y	古田K	ベック	染野
東京 14:00	石塚	岩本	野口H	江藤
東京 19:00	柿沼Y	旭	田中J	佐山

	9月			
	4日	11日	18日	25日
横浜	中山Ch	菊池	寺田	黒田
相模原	大高	内藤	山田K	立之
御代田	平井	江田	野口O	キャンプ
伊那	植原	若山	織田	キャンプ
富山	江藤	織田	山下	大下
高山	大下		吉田	
伊豆	青柳		菊池	
藤枝		芝田		小林
掛川	酒井M		岩上	
名古屋／豊橋	辻田H	上田	酒井M	滝
石川／福井	平		重田S	
近江八幡	高村	吉田	高村	高村
大阪	寺田	水渡	中山K	池島
芦屋	野口O	高村	池島	森島

	9月			
	4日	11日	18日	25日
西神	瀬川	内田	森島	久田
島根	瀬島		黒田R	
山口／広島／徳山	秋本	岡本M	上田	山徳
岡山	鈴木T	武井	後藤T	平山
徳島	中山K	江藤	小野沢	北原
坂出	染野	野田F	高嶋	古田K
高知	古田K	青柳	金子M	近森
松山／西条	白石K	平山	和田Y	内田H
福岡／別府	庄野	中野	芳竹	重枝
長崎／佐世保	岩本	重枝	杉本	上田
宮崎／小林	武井	河辺	桜本	羽石
鹿児島／熊本	古田M	上野	平山	岩
沖縄／宮古	蘇畑	飽戸	岩崎	代田
米国／カナダ＊	キャンプ	柿沼Y	江藤	藤田
バンコク		石井A		

当番表の石川／福井の項目で、担当者名の横に記入した数字は福音集会の開催日です（日曜に会場を確保できず、前日の土曜に開くものです）。

祈り会（木曜日7:30PM～）	**6**／2	9	16	23	30	**7**／7	14	21	28	**8**／4	11	18	25	**9**／1	8	15	22	29
	杉本	芳竹	牧野	佐山	山本	山徳	藤原N	小野沢	青柳	重田H	清水Y	小島	岩下	杉本	芳竹	牧野	佐山	山本
	詩篇 6-10	詩篇 11-12	詩篇 31.1-6	詩篇 7-9	詩篇 10-13	詩篇 31.14-17	詩篇 18-21	詩篇 22-25	詩篇 32.1-5	詩篇 6-11	詩篇 33.1-5	詩篇 6-11	詩篇 12-15	詩篇 16-22	詩篇 34.1-8	詩篇 9-11	詩篇 12-18	詩篇 19-23



こちら名古屋集会で～す from NAGOYA

名古屋集会は1984年、小川泰徳さん宅の家庭礼拝でスタートしました。小川さんは4月に単身赴任でこられ、しばらくは日曜日ごとに吉祥寺集会に通っていましたが、11月から名古屋集会を始められたのです。当初は小川さんと、東京にいた姉の勧めで集うようになった河合みづゑさん、教会から移ってきた辻田雅彦さん、ハル子さん夫妻、他に2、3人が不定期に参加する小さな集いでした。祈りや聖餐のパン裂きなどすべてを小川さん一人で行なったり、一人だけで家庭礼拝をしたこともあったそうです。

小川さんは３年後に東京へ戻り、入れ替わるように転勤してきた清水紀雅さん、偕子さん夫妻のお宅で礼拝をするようになりました。女性たちの祈り会や不定期の家庭集会も同じ場所で始まりました。89年末には小川さんと同じ会社の新井稔さんが奥さんの死を通してイエス様を受け入れました。集う人も12、3人に増え、その分、会場は窮屈になりました。

このため90年からは、河合徹さんがチェロの練習場所に使っていたワンルームをお借りしました。が、人数が20人前後に増えると、そこも、絨毯の上で足を崩せない状態に。新しい礼拝場所を、皆で祈りつつ探し求めていたところ1993年4月、現在の国鉄会館会議室が与えられました。JR名古屋駅からゆっくり歩いて10分、交

通がとても便利でスペースにも余裕があり、本当に感謝しています。

いま集っている人数は、通常の日曜礼拝には30人ほど、ときどき来られる方を含めると約70人になります。地理的には名古屋市街地、名古屋市北部方面、岐阜南部方面、三河方面（豊橋、蒲郡、岡崎、豊田）、三重県四日市方面の方々です。それぞれ地区ごとに祈り会や語らいのときを持ち、互いに連絡を取り合っています。蒲郡方面の人たちは数年前から分かれて礼拝を行なっていましたが、昨年6月に戻ってきました。男性は平日に集まりにくいため、日曜日の福音集会後に祈り会を行なっています。

このごろは、国内外で多発する惨事にイエス様の再臨が近いことを感じさせられて、まだイエス様を信じていない親族や友人、特に肉親の「救い」を、これまで以上に真剣に祈っています。主は集会の発足以来、祈りに応えてくださっていますが、この１月に召天した伊藤肇さんの場合もそうでした。病床でイエス様を信じ受け入れた肇さんは、天国を確信していつも平安そのもの、私たちはお見舞いに行くたびに、かえって励まされました。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。（1ヨハネ　5･14）

課題はいつもありますが、主はこれからも最善をなしてくださることを信じ、共に愛し合い、一つになって歩んで行きたいと願っています。

愛知万博などで日曜日に名古屋に来られた際は、国鉄会館７階にお立ち寄りください。毎年開く「名古屋よろこびの集い」の会場も名古屋駅から徒歩2分、交通至便のホテル「エルセラーン」ですので、いっぺん来てちょうでゃあも。

（那須　信）

礼拝と福音集会
日曜日午前10時30分から（福音集会と平行して子ども集会。その後男性の祈り会）

家庭集会（随時）の場所

津田　修	名古屋市天白区高宮町208	Tel. 052-806-7491
新井　稔	各務ヶ原市鵜沼三ツ池町1-128	Tel. 0583-83-5201
足立秀子	蒲郡市神の郷町下向山75-7	Tel. 0533-68-2035

連絡窓口

那須　信	西春日井郡豊山町青山1231	Tel. 050-1491-3490

Information Box
[インフォメーション・ボックス]

病床からの手紙

普通ならべちゃんこになっておかしくない境遇にありながら、主イエス様にあって喜んでいる、輝いている。それによって、周囲の人々を元気づけてさえいる。そのような人はキリスト集会ではめずらしくありません。その一例としてベックさんは「火曜の学び会」で、ひとりの入院患者の次のような手紙（一部）を紹介しました。

いつもお祈りくださり、ありがとうございます。病気をいただいて、家事やこの世のすべてのことから切り離されて、ただ主イエス様との静かなお交わりの中へ入れていただいていること、本当に感謝です。（中略）

どういうわけか、救われる以前より私の周りには病気で苦しんでおられる方が多いのです。いままで、そしていまでも、その方々の心の苦しみは全くわからない者であるにもかかわらず、口先だけで慰めようとしたり、主イエス様にのみご栄光を帰す者でなかったこと、を悔い改めさせられております。

主は本当に素晴らしい方ですね！偉大な方です。もっともっと主を知りたいです。病んでますますイエス様の愛を教えられ、喜びに満たされています。こんな素晴らしいイエス様を、周りの方々に少しでもお伝えできますよう、私が砕かれますように、これからもお祈りいただければ感謝です。

手術の後、計6回の抗がん剤治療のため徳島大学病院へ入退院を繰り返してまいりましたが、ちょうど「よろこびの集い」の時、最終回の投与予定です。みこころでしたら、求めている方々を見舞っていただけたらと願っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

ゴットホルト・ベック様へ　　2004年11月27日　高谷直子

中越地震被災地にみことばの贈り物

2004年10月23日の中越地震で家を失った方々の避難所に、キリスト集会有志の方々から、心のこもったプレゼントが贈られました。

プレゼントは、みことばのカードとクッキーを袋に入れたもので、集会の婦人たちの手作りです。約600袋が、イエス様の福音を伝える小冊子や単行本など2000冊を超える書物と一緒に、いくつかの避難所に配られました。

事の始まりは、地震5日後の28日夜、吉祥寺キリスト集会の祈り会の折、ベック夫人が口にした「避難している方々は時間があるので、伝道の本を贈ったらどうかしら」の一言でした。この“提案”を江藤恵子さんが同夜、新潟集会の佐藤真理子さんに伝え、佐藤さんは翌々日、同じ集会の藤田真理子さん、斉藤保子さんらと車で避難所に向かったのです。

「とりあえず、集会で発行している本や聖書、数十冊を積んで出発したのですが、1時間ほど走り回っても避難所が見つからず、困ってコンビニの人に聞いたら、すぐ近くの長岡明徳高校体育館が新潟県山古志村の人たちの避難所でした。山古志村はキリスト集会の小幡孝子さんの義姉、五十嵐久代さんが住んでいた村でしたから、最適の“行き先”でした。しかも、届け物には県の許可が必要でしたのに、係りの人が『許可を待っていたら時間がかかるから』と、30冊ほどの本を置かせてくださったのです。本当に主の導きを実感しました」と佐藤さん。

この報告に、「次は聖書のみことばを添えてクッキーを」という声が吉祥寺集会内に出て、多くの人が賛同・協力しました。あわせて書物も配ることになって11月7日、「新潟よろこびの集い」の際にプレゼントが届けられました。

その後、山古志村民は越後丘陵公園（長岡市）隣りの仮設住宅に移住し、佐藤さんと藤田さんは毎月1回、そこを訪れて、五十嵐さんや同じ村民の長島キクさんと語らいの時を過ごしています。



築12年、センターの大修理

1992年5月の献堂式から12年半、雨漏りがひどくなった西軽井沢国際福音センター（長野県御代田町）で2004年秋、屋根の全面葺き替え工事が行なわれました。工事は、当初からセンターの保守に尽力してくださっているメルリンさんら米国の大工さん9人。1期（10月18日―23日）、2期（11月13日―24日）に分けて行なわれた高所の作業は、台風の雨で中断されたこともありましたが、事故や怪我もなく、安全が守られました。平行して行なわれたセンター北側の駐車場（草地）の舗装工事も12月10日、完了。雨が降ってもぬかるまない駐車スペースが新たに72台分、増えました。工事の期間中、大工さんたちの食事の準備などさまざまなご奉仕を、集会の方々からいただきました。

おちびちゃんの合奏に異例の拍手

長野県御代田の国際福音センターで年に3回開かれる「よろこびへのコンサート」は、拍手のないコンサートとして知られています。ほめ讃えられるのはイエス様だけ、という考えによるのですが、2005年元旦のコンサートでその慣例が破られました。異例の拍手を浴びたのは、ブルーメンシュトラウス管弦楽団（キリスト集会のオーケストラ）コンサートマスター、辻純さんのお子さんたちの演奏。真理恵ちゃん（10歳、オーボエ）、百合香ちゃん（9歳、バイオリン）、光一ちゃん（8歳、ピアノ）、愛結実ちゃん（4歳、バイオリン）の器楽合奏でした。曲目はベートーベン作曲交響曲第9番第4楽章の「喜びの歌」。ぴったり息の合った、なんとも可憐な演奏に、堪りかねたように大きな拍手が沸き起こったのです。

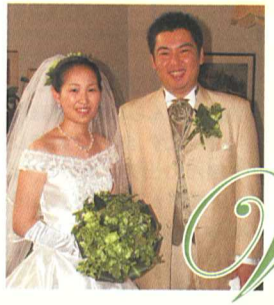




04/09 櫻井 馨・幸



04/10 三浦 敬・愛子



神のなさることは、
すべて時にかなって美しい。
神はまた、人の心に
永遠への思いを与えられた。 伝道者の書 3・11

Wedding 結婚式

結婚式と葬儀のご報告





2004年
11/01 本田 行生
11/02 渡辺 房子
11/30 水野 多可
12/08 竹原 今道

2005年
01/11 伊藤 傳
01/12 河口 静枝
01/27 小形 順子
01/29 伊藤 肇
02/20 児玉 イソ
02/24 内田 和子









Funeral 葬儀







このキリストにあって、
私たちは彼にあって
御国を受け継ぐ者ともなったのです。
エペソ人への手紙 1・10、11

03/01 北村 史奈子
03/04 飯島 夏樹
03/05 栗原 真美
03/09 星野 昭五郎
03/24 林 伸子
04/05 山本 清子





ビッキーのケーキづくり

ゼブラクーヘンはその名のとおり
美しいシマウマ模様のケーキです。
どうやったら作れるのか不思議でしょ？
出来上りを思ってワクワクする気持ちと
少しの忍耐があれば大丈夫。
生地が模様を仕上げてくれます。
トッピングをしても切り口の模様は生きるので
いろいろ試してみてくださいね。

ゼブラクーヘン

ZEBRA KUCHEN

ゼブラクーヘン
ZEBRA KUCHEN

材料

《すべて常温にしておく》 26cm丸型の分量

小麦粉　375g
ベーキングパウダー　小さじ4
卵　（L）5個
砂糖　300g
ぬるま湯　125cc
サラダ油　250cc

ココア　大さじ2
小麦粉　大さじ2



道具

型：丸型（ここでは26cmのものを使用）



20cm前後の型を
使用する場合ちょうど
半量のレシピで作る
ことができます
左は、20cmの型で
作ったところ

その他：泡立て器　ボール2つ
へら（2つあると便利）

作り方

《下準備》

a. 小麦粉とベーキングパウダーを
あわせてふるっておく

b. 大さじ2のココアと小麦粉は
別々にふるっておく

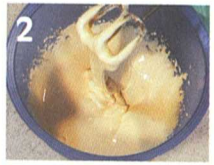
c. 卵は、卵黄と卵白に分け、
それぞれボールに入れておく



《生地を作る》

1. 卵白を
泡立て器で泡立てる
半分くらい泡立ったら
砂糖を大さじ1ずつ
を3回に分け入れ
泡立てる

ポイント　泡立ての具合は
ボールを逆さに
して落ちてこない
くらいになるまで



2. 卵黄を軽く泡立て
残りの砂糖を少しずつ
入れながら、白っぽく
なめらかになるまで
さらに泡立てる



3. ぬるま湯を
3～4回に分けて
入れながら泡立てる



4. サラダ油を
少量ずつ入れ泡立てる

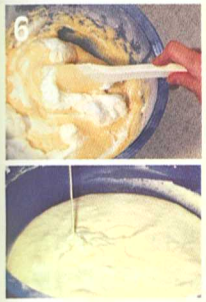
ポイント　水とオイルが入ると
ゆるいかんじになる



5. ふるっておいた
粉とベーキングパウダーを
スプーンでいれながら
泡立てる

ポイント　粉を混ぜたところで
ねっとりと重たい
状態になる（水飴状）





《生地を２色に分ける》

6. 最初に作ったメレンゲを
3回くらいに分けて入れ
へらでさっくり混ぜる

ポイント　初めに入れるメレンゲ
で生地をゆるませ、
後に入れるメレンゲは
つぶさないように
混ぜる

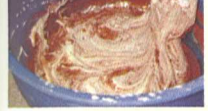
ひらひら落ちる
加減がちょうど良い



7. メレンゲが入っていた
ボールに半量を移し
片方のボールにココア
もう片方のボールには
小麦粉を大さじ2ずつ
加える



8. それぞれの生地を
へらでさっくりと
混ぜる







《型に生地を入れて焼く》
オーブンを180℃にあたためる

9. 型にバターなどを塗る
白い生地をスプーンで2杯
型の中心にのせる



10. その上から
ココア入りの生地を
スプーンで2杯のせる



11. 同じ要領で
交互に生地をのせていく

ポイント　丁寧にこの作業を
くり返すうちに生地が
美しい縞模様を作りながら
型に広がっていく



生地をすべて入れたところ

12. 180℃のオーブンで
50～60分くらい焼く

ポイント　竹串をさして生地が
付いてこなければ
焼き上がり



13. 焼き上がり
型から出して冷ます

ポイント　冷めてからカットする
1日～2日おくと
しっとりして
おいしさが増します

あっさりとした味のレシピです。
チョコレートをかけたり
パウダーシュガーをふったりして
バリエーションを楽しめます。

